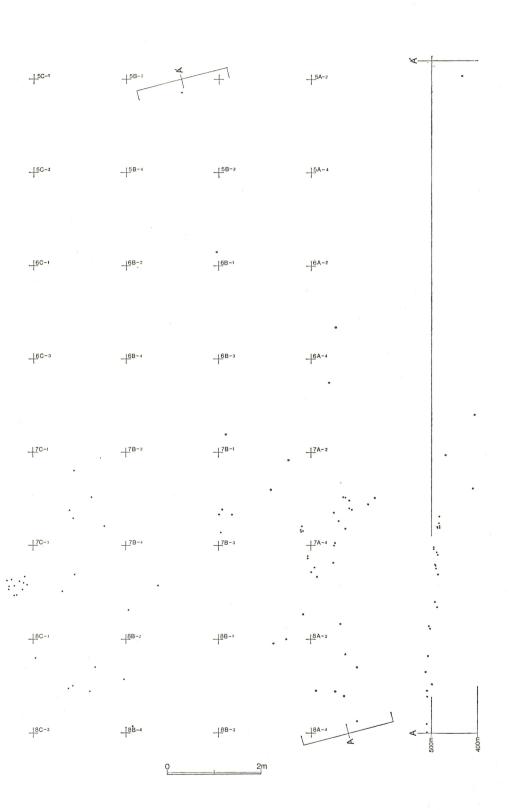


第56図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 4 区グリッド割付け図



第57図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ 一4 区遺物分布図

発掘層序

次に各地区の層序について説明を進めて行きたい。低湿地遺跡の層序の色は刻々と変化し、さらに調査区が離れているために、土層の特徴を統一することは困難をきわめた。そこで個々の土層は統一することはせずに、暗褐色純まこも層(植物遺体層)、灰白色第一粘土層、灰白色第二粘土層の三つの基本となる土層のみ全区統一し、説明を進めて行きたい。

I ─ 1 区 (第58図)

東西土層断面図の北壁で作図する。

第1層(暗褐色シルト層):耕作土、粘性はあまりなく、しまりが悪い。1㎜程の黄色ローム微 粒を含む。第2層(暗褐色シルト層):耕作土、粘性は同上、第1層より暗色である。ローム粒が 大きくなり、1~5cm程の黒色シルトブロックを若干含む。第3層(暗褐色シルト層):耕作土、 粘性は同上。第2層よりも暗い。1~5m程のロームブロック及び1~20㎜程の黒色シルトブロッ クを含む。第4層(暗褐色シルト層):耕作土、粘性はややある。第3層よりさらに暗色である。 ローム粒は小さく1 mm位が中心である。黒色シルトを多量に含み、ブロックの大きさも数 $cm\sim10cm$ 近いものが多くなる。第5層(暗褐色シルト層):粘性はややあり、しまりは悪いが第3層よりは 良い。色調は第3層より明色であるがやや灰色を帯びる。ロームブロックが上層より多い。第6層 (漆黒色粘質土層):粘性は強であり、含水性が高い。多量の植物遺体を含む。未分解のピート。 第7層(黒褐色粘質土層):粘性ややあり、含水性は高い。やや茶色味強い。多量の植物遺体を含 む。未分解のピート。レンズ状に黄白色細粒シルトブロックを含む。第8層(黒褐色粘質土層): 7・9層より黒い。性質は同上。やや植物が多い。第9層(暗褐色純まこも層):粘性ややあり、 含水性は高く、しまりは悪い。純植物遺体層であり、層全体が褐色を呈している。色調は第10層に 似るが褐色味が強い。未分解ピート。基本土層である。第10層(黒褐色粘質土層):粘性あり、含水 性高く、しまりが悪い。植物の葉・茎・根などの遺体を多量に含む。未分解のピート。第11層(漆 黒色粘質土層):性質は同上である。第6層より多く植物遺体を含む。第12層(黒褐色粘質土層): 性質同上。色調は第8層と第10層の中間。第13層(黒褐色粘質土層):粘性があり、含水性は高い。 植物遺体の量はかなり少い。色調は第6層以下では最も明るい。第14層(黒褐色粘質土層):粘性 があり、含水性も高い。植物遺体の量が多くしまりが悪い。色調も黒色化している。第15層(黒褐 色粘質土層):性質同上。第14層よりさらに黒色化している。第16層(暗褐色土層):粘性が強く、 含水性が高い。しまりも悪い。植物遺体の根に鉄分が付着し赤褐色化している部分が認められる。 第17層(灰褐色土層):性質は同上。右上方では白色化が進行している。第18層(灰黄色粘質土層) : しまりは上層より良い。植物遺体を比較的多く含む。第19層(灰白色第一粘土層): 粘土質であ る。含水性は高いが、植物遺体はほとんど認められない。基本土層である。第20層(灰白色第二粘

土層):性質同上。第19層より黄味を帯びている。基本土層である。第21層(暗黄灰色土層):性 質同上。植物遺体に鉄分沈着が認められる。白色化している所も認 め られ る。第22層(暗褐色土 層):性質同上。第23層(黒褐色土層):ソフト化したローム層である。第24層(黒褐色土層): ハードロームである。第25層(暗黄褐色土層):第23・24層から下層への漸移層で、黒色と明黄色 土がまだらに混じる。第26層(暗褐色土層):ボソボソしている。第27層(黄褐色ローム層):色 調はやや褐色味が強い。第28層(淡黄褐色ローム層):全体的に脱色されたように白味を帯びる。 第29層(灰黄色ローム層):粘性強。全体的に白味を帯びる。第28層より暗色である。第30層(灰 黄褐色ローム層)。第31層(淡青灰白色ローム層)。第32層(淡灰黄褐色ローム層):第30層より色 調は薄い。第33層(暗褐色ローム層)。第34層(暗褐色ローム層):第33層のソフト化したものであ る。第35層(灰褐色粘質土層):粘性が強く、しまりは悪くやわらかい。第36層(淡黄灰色粘質土 層)。第37層(黒褐色粘質土層):粘性ややあり、含水性も高い。植物遺体を多量に含む。上半部に 部分的に茶褐色砂質シルトブロックを含む。未分解のピート。第38層(黒褐色粘質土層):性質同 上。第9層より黒味が強い。第39層(黒褐色土層):性質は第13層と同じであるが、黒色が強い。 第40層(黒褐色土層):第15層とほぼ類似するが、やや黒色である。第41層(灰黒色土層):植物遺 体層の最下層である。黒色化した植物遺体を含む。第42層(淡灰褐色粘質土層):粘性ややあり、 含水性は少く、しまりが悪い。0.1cm~0.5cmの炭化物を含有する。 0.5cm~2cmの白色粘質土を含 有する。僅かに植物遺体を含む。第43層(灰褐色砂質土層):第42層とほぼ同類の層であるが、粘 性は弱く、植物遺体が微増する。0.5cm以下の炭化物を含む。第44層(褐色砂質土層):0.5cm前後 の炭化物を混入する。第45層(暗褐色砂質土層): 粘性は弱い。しまりがあり、含水性が高い。植 物遺体を少量含む。木の実、0.5cm~1cmの炭化物、木片を混入する。丸木舟を検出した層である。 第46層(暗褐色粘質土層):木の実、炭化物を少量含む。第47層(灰白色粘土層):粘性強。炭化 物を少量含有する。

以上、I-1区の層序概要をのべた。台地部にかかる層で、傾斜する $n-\Delta$ 層が認められた。第 23層 \sim 第45層がこれに当たろう。調査は標高 3mで終了する。

I — 2 区 (第59図)

南北土層断面の西壁で作図する。

第1層(茶褐色シルト層):耕作土。第2層(暗褐色シルト層):粘性はややあり、しまりがない。植物遺体を若干含む。第3層(黒褐色シルト層):性質同上。第4層(暗褐色シルト層):第3層より粘性も弱く、色調も明るい。第5層(黒褐色シルト層):植物遺体の量は第3層と第4層の中間である。第3層より黒い。第6層(黒褐色シルト層):粘性が強く、含水性が高い。第7層(暗褐色純まこも層):基本となる層である。第8層(黒褐色混まこもシルト層):含水性が高く、植物遺体を多量に含む。第7層がよく原形をとどめた植物を含むのに対して、本層のものは繊細である。第9層(漆黒色シルト層):粘性が強く、含水性が高く、しまりは非常に悪い。第11層との境の下底部に黄灰白色の細粒シルトブロックを点々と含む。第11層(黒褐色シルト層):性質同上。植物遺体がやや少い。第13層(漆黒色シルト層):性質同上。植物遺体がやや少い。第13層(漆黒色シルト層):性質同上。

性が高く、しまりがなくやわらかい。植物遺体は上層の方が多い。第15層(黒褐色シルト層):性 質同上。微細な砂を少量含む。第16層(漆黒色シルト層): 粘性が強く、含水性も高い。しまりは ややある。第17層(黒色シルト層):性質は同上。植物遺体を少量含む。第18層(暗灰色シルト層): 粘性が強く、含水性が高い。しまりはややある。植物遺体は細かな繊維である。第19層(灰白色第 一粘土層):基本となる層である。第20層(黒褐色シルト層):粘性はあまりなく、含水性が高い。 植物遺体が多く、しまりが悪い。第21層(暗褐色シルト層): 粘性はあまり認められない。下半で はやや粘性を帯び、灰色味が増す。植物遺体は第20層より多い。第22層(灰白色第二粘土層):中央 部にやや黒味を帯びる。基本となる層である。第23層(明灰褐色粘質土層):粘性が強く、含水性 もややある。植物遺体を少量含む。第24層(灰褐色粘質土層):粘性が強く、含水性も多い。しま りやや有。厚さ 1.5cm 位のまこも層と灰白色層が互層をなし、まこも層は炭化している。このため 色調はやや暗く、植物遺体の量は所により大きく異なる。第25層(暗灰褐色土層):性質は第23層と ほぼ同じである。灰白色と暗灰白色粘質土が互層をなしている。第26層(灰白色土層):粘性が強 く、含水性は低い。しまりやや有。植物遺体は微量だが大型のものを含有している。第27層(暗灰 褐色土層):上下でやや褐色味が強く、植物遺体の量も上下で多く、中間は微量である。粘性強、 含水性強、しまりはやや有である。第28層(暗灰褐色ンルト層):下層の明灰緑色層への漸移層で ある。従って上半では黒く、下半では明色になっている。第29層(黒褐色シルト層):まこもを多 量に含有するため、しまりが無く、粘性もあまり無い。第30層(暗褐色土層):粘性があり、含水 性もややある。木の種子を多量含む、通称木の実層である。第31層(灰色粘質シルト層):粘性強、 含水性弱、しまりはやや有。植物遺体を少量含む。5 mm前後の炭化物を含む。木の実もまれに含有 する。第32層(黄灰色粘質シルト層):性質同上。木の実(特にクリ・ヒシ)、樹皮を多量に含む。 第33層(灰色シルト層):性質同上。植物遺体はほとんど見られない。白い絵具を水面に流した様 な文様が薄く入る。第34層(暗縁灰シルト層):性質同上。ヒシの実が少量認められる。第35層(暗 緑灰シルト層):性質同上。砂をレンズ状に含む。第36層(暗灰緑色粘質シルト層):性質同上。 |毛根状の植物遺体を多く含む。炭化物、木の実を微量含む。第37層(灰白色粘質シルト層):性質 同上。第38層(暗灰白粘質シルト層):性質同上。毛根状の植物遺体を含む。第39層(灰白色粘質 シルト層):性質同上。ヒシの実を多く含む。第40層(灰白色粘質土層):性質同上。木の実層が やや色調を変えたような層である。第41層(黒色土層):粘性はない。有機物とくに木の枝・植物 遺体等が層をなしているものである。

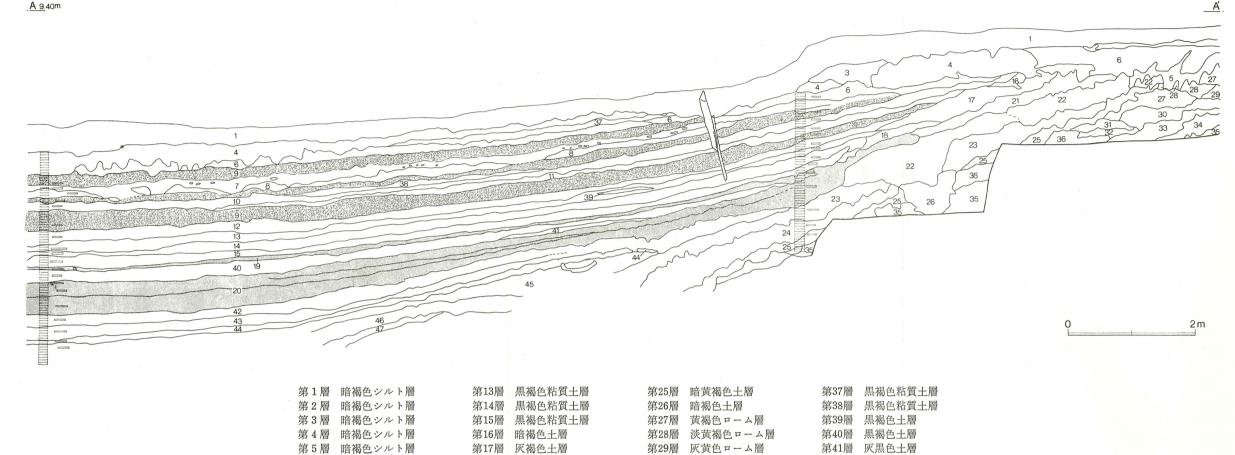
調査は水の流入が多くなって来たため標高4mで終了している。

I — 3 区 (第60図)

東西土層断面の北壁で作図を行なった。

第1層(暗褐色土層):耕作土。第2層(黄褐色土層):粘性ややあり。第4層まで含水性はあまり高くない。砂質である。第3層(暗灰褐色土層):やや灰色がかった粘土を含む。植物遺体を少量含む。第4層(黒褐色シルト層):しまりは悪い。植物遺体を少量含む。第5層(黒褐色土層):粘性はあまりない。この層以下含水性は高い。しまりはない。微量の砂を混入する。第6層(黒褐色土層):植物遺体を多量に含み、しまり、粘性はない。黄灰青色シルトブロックを含む。





第58図 伊奈氏屋敷跡 [一1 区土層断面

第30層 灰黄色ローム層

第33層 暗褐色ローム層

第34層 暗褐色ローム層

第35層 灰白色粘質土層

第36層 淡黄灰色粘質土層

第32層

第31層 青灰白色ローム層

淡灰黄褐色ローム層

第18層 灰黄色粘質土層

第19層 灰白色第一粘土層

第20層 灰白色第二粘土層

第21層 暗黄灰土層

第22層 暗褐色土層

第23層 黒褐色土層

第24層 黒褐色土層

第6層 漆黒色シルト層

第7層 黒褐色粘質土層

第8層 黒褐色粘質土層

第10層 黒褐色粘質土層

第11層 漆黑色粘質土層

第12層 黒褐色粘質土層

第9層 暗褐色純まこも層

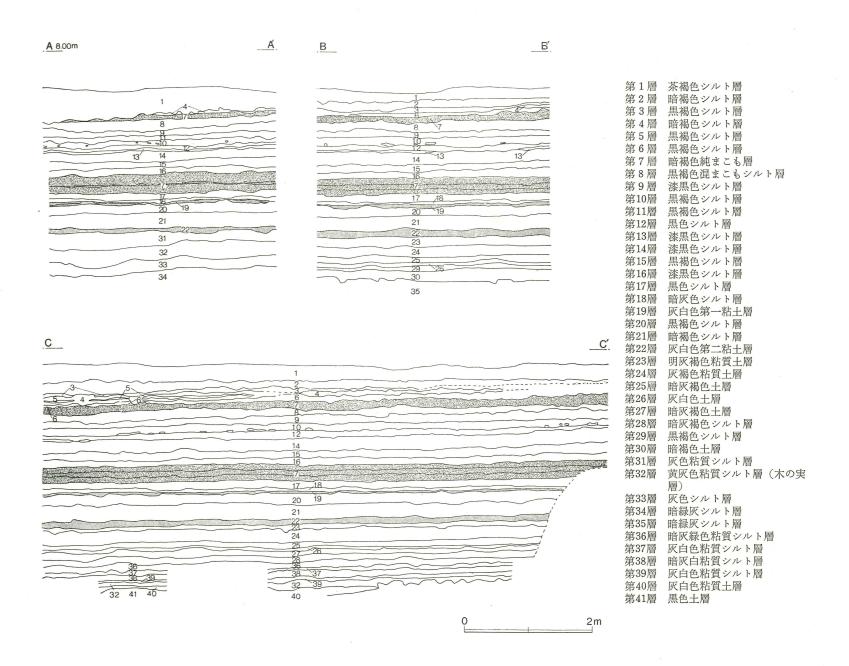
第42層 淡灰褐色粘質土層

第43層 灰褐色砂質土層

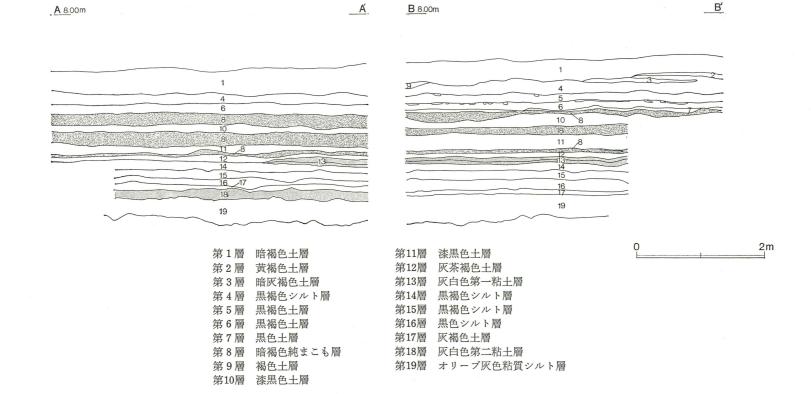
第45層 暗褐色砂質土層 第46層 暗褐色粘質土層

第44層 褐色砂質土層

第47層 灰白色粘土層



第59図 伊奈氏屋敷跡 [一2区土層断面図



89

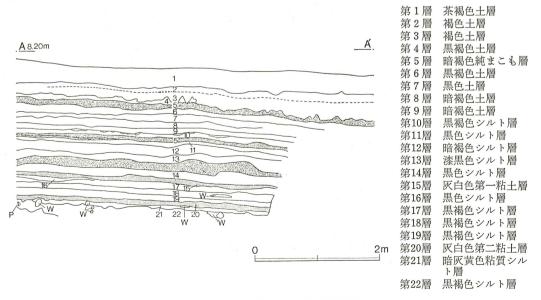
第60図 伊奈氏屋敷跡 [- 3 区土層断面図

第7層(黒色土層): 粘性少しあり、しまり悪い。植物遺体は滅少する。第8層(暗褐色純まこも層): 基本土層。第9層(褐色土層): 性質は第7層と同じ。第10層(漆黒色土層): 性質同上。繊維質な植物遺体を含む。第11層(褐色土層): 性質同上。大形な植物遺体を多量に含有。第12層(灰褐色土層): 色調のみ違い、特徴同上。第13層(灰白色第一粘土層): 基本土層。第14層(黒褐色シルト層): 粘性弱、しまりなし、植物遺体を多く含む。第15層(黒褐色シルト層): 性質同上。砂粒を含む。第16層(黒色シルト層): やや粘性を増す。第17層(灰褐色土層): 第15層より粘土、植物遺体の量が増す。第18層(灰白色第一粘土層): 基本土層。第19層(オリーブ灰色粘質シルト層): しまり有、含水性はあまりない。ヒシ他の種子を少量含む。

以上である。植物遺体は、まこもが目立った。標高4.5mで調査は終了する。遺物は検出されず。 $[-4 \, \hbox{$\tilde{\mathbb{E}}} ($61 \, \hbox{$\mathbb{B}})]$

東西土層断面の北面で作図する。

第1層(茶褐色土層):耕作土。第2層(褐色土層):粘性中、含水性はあり、しまりがない。第3層(褐色土層):性質同上。第2層よりやや黒みを帯びる。第4層(黒褐色土層):粘性少、含水性は高く、しまりなし。第5層(暗褐色純まこも層):基本土層。第6層(黒褐色土層):植物遺体を多量に含み、含水性が高い。しまり、粘性なし。第7層(黒色土層):性質同上、やや植物遺体が減少する。第8層(暗褐色土層):第7層と類似する。第9層(暗褐色土層):性質同上、植物遺体はさらに減少して少量となる。第10層(黒褐色シルト層):上層に黄灰色の粘土(火山灰?)をのせる。粘性なく、しまりがない。含水性が高く、植物遺体は増大する。第11層(黒色シルト層):粘性あり、含水性は高く、しまりがない。植物遺体は減少する。第12層(暗褐色シルト層):粘性なし、しまりなし、含水性は高い。全体的にきめが細かい。植物遺体を少量含む。第13層(漆黒色シルト層):第14層と類似するが、植物遺体が増大する。第14層(黒色シルト層):粘性が強い。植物遺体は減少する。第15層(灰白色第一粘土層):粘土層である。植物遺体はほとん



第61図 伊奈氏屋敷跡 [一4区土層断面図

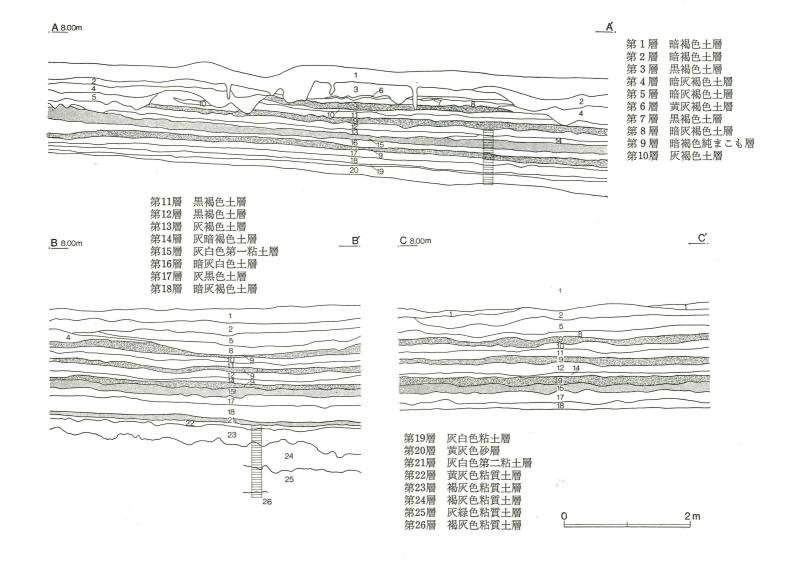
ど含まれない。基本土層。第16層(黒色シルト層):第14層より灰色味を帯びている。第17層(黒褐色シルト層):粘性中、しまりよい。含水性も高い。植物遺体をやや多く含む。第18層(黒褐色シルト層):粘性なく、しまりあまりない。含水性は高い。植物遺体を多量に含む。レンズ状に粘質土が入る。第19層(黒褐色シルト層):第18層と類似するが、やや白色化している。第20層(灰白色第二粘土層):黄灰色化している。基本土層である。第21層(暗灰黄色粘質シルト層):含水性高く、しまり良い。植物遺体を微量に含む。炭化物、種子、流木を少量含む。第22層(黒褐色シルト層):粘性あり、しまり良い。土器片、種子を多く含む。

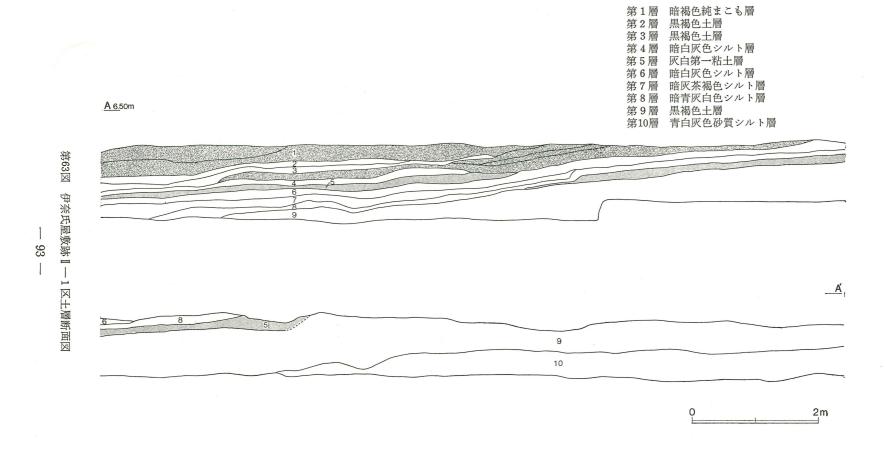
以上が I-4区の層序の概要である。第22層では丸木舟の一部、土器片多数を出土しており、標高は $5\sim6$ mにかけてである。繩文後~晩期にかけての土器が出土している。土器が検出されなくなった標高 5 m で調査を終了した。

I ─ 5 区 (第62図)

東西土層断面の南壁で作図を行なった。台地部から直交し、A-A'、B-B'、C-C'と約5m間隔で作図した。

第1層(暗褐色土層):耕作土。第2層(暗褐色土層):第1層より明るい。植物遺体を含む。 第3層(黒褐色土層):第2層に黒色土が混入したもの。第4層(暗灰褐色土層):粘性あり、含水 性ややあり、やや黄色を帯びている。植物遺体を含む。第5層(暗灰褐色土層):色調はやや明る い。第4層よりも植物遺体の混入量が少い。第6層(黄灰褐色土層):粘性、しまりあり。含水性 ややあり。第7層(黒褐色土層):粘性少、含水性は高い。植物遺体を多重に含む。第8層(暗灰 褐色土層):粘性、含水性あり。植物遺体を少量含む。やや黒色を帯びる。第9層(暗褐色純まこ も層):植物遺体層(まこもが主体を占める)である。基本土層。第 10 層(灰褐色土層):粘性 中、含水性有、しまり良。植物遺体を含む。第11層(黒褐色土層):粘性はあまりない。含水性は 高い。しまり悪い。植物遺体を外量に含む。第12層(黒褐色土層):灰色を帯びる。他は同上。第 13層(灰褐色土層):黒色を帯びる。他は同上。第14層(灰暗褐色土層):第13層より明るい。粘 性が増すが他は同上。第15層(灰白色第一粘土層):粘土層である。基本土層。第16層(暗灰白色 土層):粘性が高く、しまりがある。第15層より明るい。第 17 層(灰黒色土層):第 16 層より暗 い。植物遺体を含む。第18層(暗灰褐色土層):植物遺体と粘土(灰白色土)の互層である。第19 層(灰白色粘土層): 粘性あり、しまりがある。色調はやや青味を帯びる。第20層(黄灰色砂層) :上・中・下の三層に分けられる。上・下層は黄灰色を帯びている。砂層中心部には炭化物・種子 を多量に含み灰色が強くなる。土器、木製品を検出する。第21層(灰白色第二粘土層):基本土層 である。植物遺体をレンズ状に少量含む。第22層(黄灰色粘質土層):粘性強、以下すべての層と もしまりがある。若干褐色味を帯びる。繊細な植物遺体を少量含む。第23層(褐灰色粘質土層): 含水性は高い。繊細な植物遺体、種子(ヒシの実)を少量含む。炭化材も少量含む。第24層(褐灰色 粘質土層):粘性強。含水性は高い。種子(ヒシの実、ドングリ)、炭化材を多量に含む。漆塗弓、土 器片を検出する。色調が異るため層序番号を変えたが、台地寄りの第20層に連続するものである。 第25層(灰緑色粘質土層):粘土層。第26層(褐灰色粘質土層):含水性が高い。草本、木本類の 遺存体が極端に多く、層全体が有機物層を呈する。





以上であるが、東から西へ傾斜し、土層断面C一C'では水平に堆積している。A—A'の第20層 下は青白色な砂質を帯びた粘土層となっており基盤と考えられる。

Ⅱ — 1 区 (第63図)

東西土層断面の北面で作図する。

上層は重機により除去してしまっている。第1層(暗褐色純まこも層):基本土層。第2層(黒褐色土層):粘性少、含水性はあまりない。第3層(黒褐色土層):第2層よりやや暗い。他は同上。第4層(暗白灰色シルト層):粘性強。第5層(灰白色第一粘土層):基本土層。第6層(暗白灰色シルト層):黒褐色シルトと白灰色シルトが互層を成している。第7層(暗灰茶褐色シルト層):粘性中、含水性はやや高い。少量の植物遺体、小型の種子を含む。白灰色のシルトブロックを混入する。第8層(暗青灰白色シルト層):粘性中。第9層(黒褐色土層):粘性弱、含水性が高い。少量の植物遺体を含む。第10層(青白灰色砂質シルト層):粘性弱。上半は黄灰色、下半は濃青白灰色、最下部では青灰色の砂質層となる。

Ⅱ-2区(第64図)

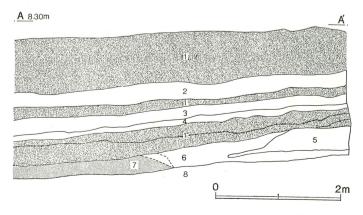
南北土層断面の東面で作図を行なう。

第1層(暗褐色純まこも層):基本土層。第2層(黒色土層):粘性あまりなし。含水性が高く植物遺体を多量に含み、しまりが悪い。第3層(黒色土層):第2層よりやや明るい。他同上。第4層(灰褐色シルト層):第3層と類似している。第5層(明茶褐色土層):粘性あり。堀の落ち込みにあたる。第6層(暗灰シルト層):含水性が高い。植物遺体、炭化物を若干含む。堀に堆積した層である。第7層(灰白色第一粘土層):基本土層。第8層(明茶褐色土層):粘性弱、砂質化している。

■ -3 区 (第65 · 66図)

A-A'、B-B'は、階段状に掘り下げた上段で、A-A'は西面を、B-B'は北面を作図した。 C-C'、D-D'は最下部に残したベルトの東面、北面をそれぞれ作図した。 E-E'は中央の東面を作図した。以上の結果、作図位置が異るため3種の層序説明を行なうことにする。

A-A', B-B'



第64図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ - 2 区土層断面図

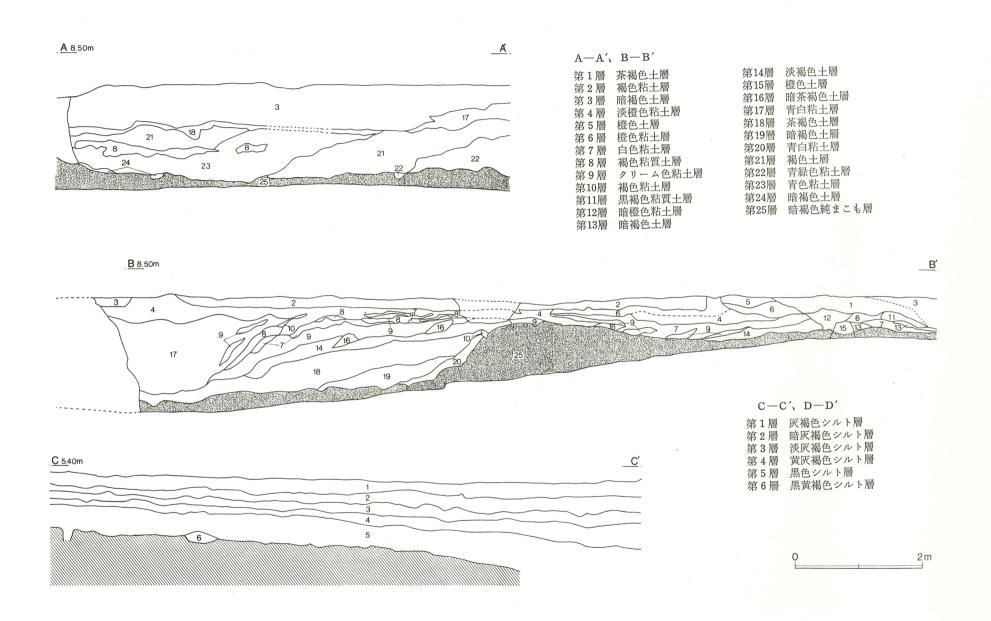
第1層 暗褐色純まこも層 第2層 黒色土層

第3層 黒色土層

第4層 灰褐色シルト層 第5層 明本褐色層質層

第5層 明茶褐色層第層 第6層 暗灰シルト層

第7層 灰白色第一粘土層 第8層 明茶褐色土層



第65図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ 一 3 区土層断面図

第1層(茶褐色土層):一部でやや粘性を帯びている。第2層(褐色粘土層):粘性強。含水性 はあまり高くない。しまり良し。第3層(暗褐色土層):耕作土。一部粘土の流れ込みあり。若干 しまり良し。第4層(淡橙色粘土層):粘性強、含水性はあまりない。第4層(橙色土層):粘性 強、橙色・白色粘土と褐色土、黒色土を混入する。第6層(橙色粘土層):粘性強、含水性は低い。 第7層(白色粘土層)。第8層(褐色粘質土層):粘性強、しまりよし。第9層(クリーム色粘土 層): 褐色粘土と青白色粘土が斑点状に入り込む。 第10層(褐色粘土層)。 第11層(黒褐色粘質土 層): 粘性強。第12層(暗橙色粘土層): 黒色土と橙色粘土が斑状に混っている。第13層(暗褐色 土層):粘性弱。第14層(淡褐色土層):粘性弱、橙色粘土粒、青色粘土粒を多量に含む。第15層 (橙色土層):黄色でやや橙色部分あり。軟質砂岩ブロックを多量に含む。第16層(暗 茶 褐 色 土 層):砂質で粘土を混入しない。第17層(青白粘土層):多色の粘土を混入する。第18層(茶褐色 土層):青色粘土、橙色粘土、黒色土を斑点状に含む。第19層(暗褐色土層):青色粘土ブロック を多く含む。第20層(青白粘土層):褐色土を混入する。第21層(褐色土層):粘性強、しまり良 し。青緑がかった粘土と褐色土が縞状に混じる。第22層(青緑色粘土層):粘性強。第23層(青色 粘土層):粘性強、部分的に褐色土ブロックを含む。第24層(暗褐色土層):粘性弱、埋め立て跡 の土留めの竹、木材等を含む層。第25層(暗褐色純まこも層):含水性が高い。しまりなし。基本 土層。

C-C', D-D'

第1層(灰褐色シルト層):植物遺体、炭化物、流木を少量含む。全層共に遺物包含層である。各層、粘性、含水性強。第2層(暗灰褐色シルト層):植物遺体、炭化物、流木を多量に含む。第3層(淡灰褐色シルト層):植物遺体、炭化物、流木を少量含む。第4層(黄灰褐色シルト層):下半は暗灰色になる。他同上。第5層(黒色シルト層)。第6層(黒黄褐色シルト層):まだら状に黒色を帯びている。以下ローム層である。

E-E'

第1層(黄褐色土層)。第2層(褐色土層):テフラ、スコリアを多量に含む。第3層(黄褐色土層)。第4層(褐色土層):テフラ、スコリアを多量に含む。第5層(暗褐色土層)。第6層(黒褐色土層)。第7層(黒褐色土層):黄灰色の粘土を混入する(火山灰?)。第8層(暗褐色純まこも層):基本土層。第9層(茶褐色砂層):火山灰。第10層(黄色粘土層):火山灰。第11層(黒褐色土層)。第12層(黄色粘土層):火山灰。第13層(黒色粘土層):以下いずれの層も、粘性強、含水性高く、しまり良し。第14層(黒色粘土層):植物遺体を少量含む。第15層(黒色粘土層):植物遺体をほとんど含まない。第16層(白灰色粘土層)。第17層(黒色粘土層):第15層と類似する。第19層(灰白色第一粘土層):基本土層。

以上、層序の概要をのべた。調査はまず重機により上層を除去し、E-E'の土層断面を作成した。この時点では上層の第 1 層から第 7 層までが盛土らしいということで終了していた。つづいて区全体を標高5.4m まで削除した。この時点で区北側と西側に粘土の盛土が植物遺体の上に認められ、なお西面では埋め立ての土が流れ出ないように柵を作っているのが検出された。そこでA-A'、B-B'を作図したが、E-E'との関連はつかめなかった。C-C'、D-D'は、遺物包含層の層序である。

Ⅱ-4区(第67図)

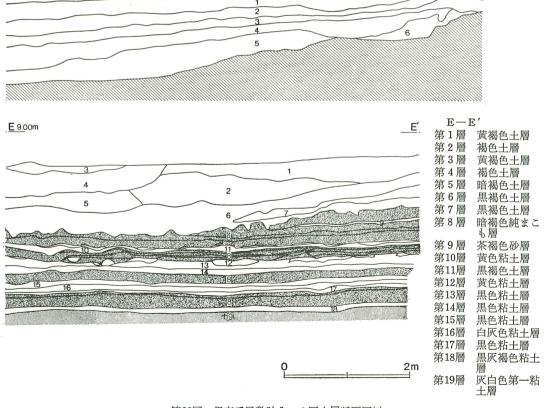
D 5.40m

A-A'、B-B'は南東コーナーを、C-C'は東西土層断面の北壁で作図を行った。

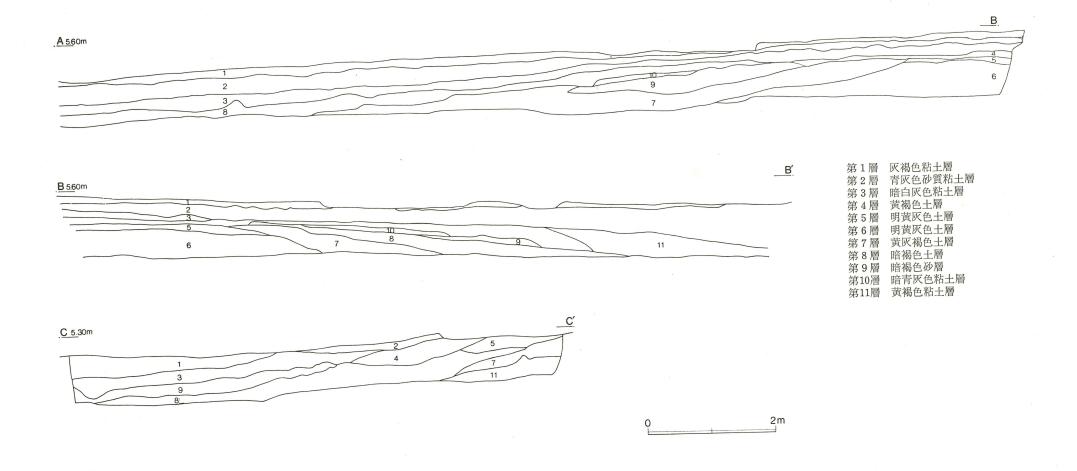
第1層(灰褐色粘土層):含水性中、しまりやや良。少量の炭化木材、種子を含有。第2層(青灰色砂質粘土層):砂質で色調は青灰色を呈する。最大0.5cmの少石を少量含有する。炭化木材、種子を多量に含む。第3層(暗白灰色粘土層):含水性小、しまり良。多量の炭化木材、少量の種子を含有。層の中部からは砂が含まれ、0.3cm程の小石も含まれるようになる。下半は赤褐色化している。第4層(黄褐色土層):砂質層で2~3cm程の小石を多量に、また、濃青灰色粘土をブロック状に含有する。第5層(明黄灰色土層):粘性中、含水性中。第6層(明黄灰色土層):第5層と類似するがやや明色を呈する。しまりが悪い。第7層(黄灰褐色土層):しまり良。上半は砂質、下半は粘土質である。1cm程の小石、炭化木材、種子、青灰色・明黄色粘土(ブロック状)を少量含む。第8層(暗褐色土層):第5層と類似する。第9層(暗黄褐色砂層):第7層と類似するが暗い色を呈する。しまりが良い。炭化木材、種子、青灰色粘土(ブロック状)を少量含む。第10層(暗青灰色粘土層):含水性中、しまり良。炭化物、種子、砂を少量含有する。第11層(黄褐色粘土層):色調は第4層に類似するが、含有物は極度になくなる。

第5・6層が台地部からつづく土層であり、そこに流れ込むように $7\sim11$ 層が堆積しており、第 $1\sim4$ 層はその上全体に、堆積している。

D'



第66図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区土層断面図(2)



第67図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ 一 4 区土層断面図

土器

当遺跡から出土した土器は、総量でコンテナバット30箱にのぼっている。その大部分は繩文時代後期中葉から同晩期前葉に比定されるものであり、わずかに早期末の土器が出土している。ことに、安行式期の土器が主体を示めており、他の土器は比較的出土量が少なかった。なお、これらの土器はいずれの地区においてもほぼ同一層から出土している。

出土は $[-4 \boxtimes$ から最も多く、次に $[-3 \boxtimes$ からの出土が多かった。 $[-3 \boxtimes$ 、 $[-2 \boxtimes$ 、 $[-3 \boxtimes$ では、 $[-3 \boxtimes$ では、 $[-3 \boxtimes$ では、まったく土器は検出されしなかった。また主体を示める安行式期の土器の傾向としては無文土器が多く、また底部土器も見られた。

一方、表裏面に炭化物の付着が明瞭に観察される土器が多数出土しており、低湿地にある遺跡の ためか非常に良好な保存状態を見せている。

以上、記述を進めるにあたり、第1群から第5群に大別し、個々については観察表として示した。

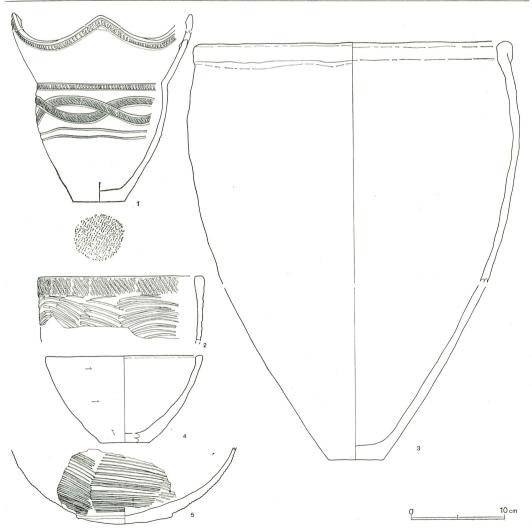
- 第1群 繩文時代早期後葉
- 第2群 繩文時代前期中葉
- 第3群 繩文時代中期後葉
- 第 4 群 繩文時代後期中葉
- 第5群 繩文時代後期末葉~晚期前葉

土器は、出土区ごとに説明を行なっていくことにする。

調查区出土土器観察一覧

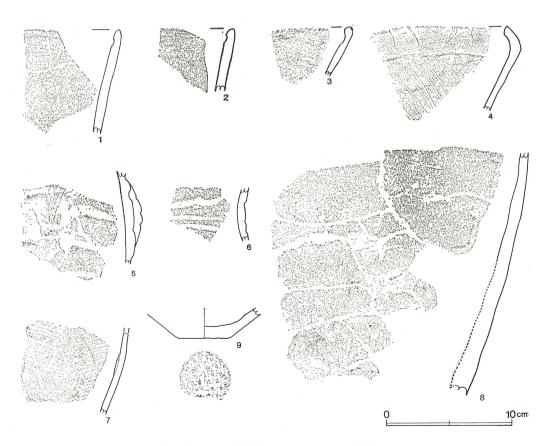
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
68—1	4-A2	4単位の波状口縁を呈している。口縁は立ち気味に内彎し、胴部で括れて、上半部が朝顔状に開き、下半部が脹らみながら底部へ移行する器形を呈する。波状口縁の一部が欠損するがほぼ完形品である。口径19.5cm、底径5.5cm、器高20cmを測る。口縁部と括部に2本の沈線間にキザミが施文されている。胴部は2本対の沈線が2本波状に施文されレンズ状の文様を5単位作っている。胴中位にも2本対の沈線が巡る。縄文はRLである。	黒色に光る粒子及び 砂 粒 を 含む。焼成は良好である。色調は黒色である。	
2	5—A	口縁は直線的に立ち上がる。口径18cmを測る。口縁部に縄文RLが施文される。胴部には横走する条線が描かれる。	胎土、焼成、色調は同上。内面 に黒色の炭化物が附着している。	
3	5—A ₆	口縁はやや内傾し、胴部上半でやや脹らみを持ちゆるやかに底部に至る深鉢形土器である。口唇部は外側におりかえされ肥厚している。口径33.4cmを測る。無文土器である。	胎土、焼成同上、色調は暗褐色 を呈する。	,

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
68—4	5—D ₂	無文の土器で、椀状を呈する浅鉢である。 口唇部はやや丸味を帯びており、内側に若干肥厚する。口径17 cm 、底径 5 cm 、器高 $9.4~cm$ を測る。器面は、左 \rightarrow 右に向って器面調整が行なわれている。	胎土、焼成同上。色調は黒褐色 を呈する。内面中~下半に黒色に 光る付着物がある。		
5	4-D	横走の条線が器面全体に施文されている。 底部付近の破片であり、内面は研磨されてお り、浅鉢形を呈する土器と推察される。	砂粒、黒色の粒子を含む。焼成 は良好である。色調は黒褐色を呈 する。		
69—1	4—A ₇	無文の土器である。あるいは口縁部に無文帯を有する土器の一部かもしれない。口縁内側に一条の沈線が巡る。3は口唇部にヘラ状工具によるキザミが巡っている。	白色粒、砂粒を多量に含む。焼成良。色調1・2は灰白色、3は 黒色を呈する。		



第68図 伊奈氏屋敷跡 [一1区出土土器実測図

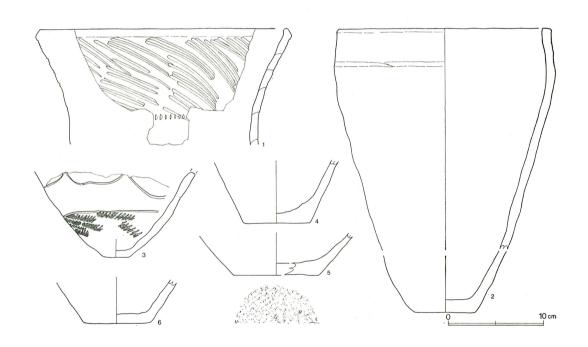
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備	考
69—4	4—A4	ロ唇部が内屈する深鉢形土器と思われる。 ロ縁肩部以下に、ヘラ状工具により斜位の多 条の沈線が描出されている。	砂粒を含む。焼成良、色調黒色 を呈する。		
5 • 6	5—A	棒状工具による圧痕を有する縦長のコブ状の貼付文を有する、深鉢形土器であろう。沈 線によるモチーフが器面をかざる。			
7	5—A ₅	横走の浅い条線が施された土器である。内 面に厚く炭化物が付着している。	胎土、焼成、色調は4に同じ。		
8	5—A ₆	無文の土器である。	砂粒、小石粒を含み、全体的に ザラついている。焼成やや不良、 色調にぶい黄褐色を呈する。		
9	5-A	底部である。底面には2本越2本浸の網代 を有する。	砂粒、黒色に光る粒子を含む。 焼成は良好である。色調は黒色を 呈する。	-	



第69図 伊奈氏屋敷跡 [一1区出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土• 焼 成•色 調 等	備考
70— 1	4—A4	口唇部が内屈し、口縁が開く平縁の深鉢形土器である。口径26.4cmを測る。内屈部は無文であり、括れ部にヘラ状工具によるキザミが巡る。口縁部は横走の幅広の条線が施文される。頸部には無文帯を有する。	砂粒を含む。焼成良、色調にぶ い褐色を呈する。	
2	5—A ₆	ロ縁部で内傾し、ゆるやかに底部に向う、 平縁の深鉢形土器である。口径 21 cm、 現 高 23.3cmである。無文土器である。	砂粒を多量、小石を少量含む。 焼成良、色調灰白色を呈する。	
3	4—A	底部付近の土器である。上部には棒状工具による弧線文が認められる。下半にも沈線が巡り、以下原体LRの縄文が粗に施文されている。	胎土、焼成同上。色調黒褐色を 呈する。	
4 ? 6	4 • 5 —A	底部片である。底径 4 は 7 cm、 5 は 9 cm、 6 は 7 cmを測る。 5 は 1 本越 1 本潜の網代痕を有する。	胎土、焼成同上。色調4は赤褐色、5・6は明灰褐色を呈する。	
71— 1	1	貝殻状工具による、縦走、斜走の条痕が施 文される。	胎土に繊維を若干含む。焼成は 良好である。色調は淡褐色を呈す る。	
3	2	原体RLの縄文が施文されている。	胎土に繊維を含む。 焼 成 は 良 好。色調は褐色を呈する。	
4	3	竹管状工具による平行沈線が横走する。地 文に原体LRの縄文が施文される。	白色粒、砂粒を含む。焼成良。 色調褐色を呈する。	
5 • 6	4-A	深鉢の胴部破片。棒状工具による沈線間が 磨消されたものである。地文に原体LRの縄 文が施文される。6は、屈曲部分であり、上 部には列点が描かれている。	砂粒を含む。焼成良。色調、5 は黒色、6はにぶい黄橙色を呈す る。5は内外面に黒色の付着物が 認められる。	
7 • 8	4—A	深鉢の胴部破片である。横走する2本の沈線間に同様工具による綾杉文が施文され。7は上部に棒状工具による列点が、8は原体LRの縄文が施文されている。	胎土、焼成同上。色調7は外面 褐色、内面黒色を、8は黒色を呈 する。7は外面上半に炭化物が付 着している。	
9 • 11 13 • 14	5—A ₅	深鉢の底部付近の胴部破片である。地文に 斜行する条線が施される。	胎土、焼成同上。色調は黒褐色 を呈する。11は外面に炭化物付着	
10	5 — A	口唇部に突起を有する。平縁の深鉢形土器である。棒状工具による2本の沈線間にキザミが施されたものが、4段にわたり巡っている。	胎土、焼成同上。色調は黒色を 呈する。内外面に炭化物が付着す る。	

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備	考
71—12	$5-A_5$	幅広の横走の条線が施文されている。下部 の土器断面部には黒色に光る炭化物が附着し ており、土器が欠損した後も使用したものと 思われる。	胎土、焼成同上、色調にぶい褐 色を呈する。		
15	5 — A	底部付近の縄文土器片である。原体RLの 縄文が施文される。	胎土、焼成同上。色調外面明褐 灰色、内面黒色を呈する。		
16	4-C	小波状を呈する鉢形土器である。口縁部で やや内彎し、体部はゆるやかに底部に移行す る。口縁部には段を有している。	砂粒を含む。焼成良。色調黒色 を呈する。		



第70図 伊奈氏屋敷跡 I — 2 区出土土器実測図



第71図 伊奈氏屋敷跡 [— 2 区出土土器拓影図

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調 等	備考
	4—A6		砂粒を含む。焼成やや悪い。色 調にぶい黄橙色を呈する。	<u>ин</u> 49
2	5—A ₂ — I	口縁が内彎し、緩やかな脹らみをもって底部に至る深鉢形土器である。口径23cm、現高24.5cmを測る。平縁を呈し、口唇部は肥厚している。胴上半部を沈線で区画した4帯の隆起縄文帯が巡っている。さらに文様を分割する小突起が付されている。縄文は原体RLによる。胴下半部は斜走する条線が施文されている。	砂粒を含む。焼成は良好。色調は上半極暗褐色、中位黒褐色、下半にぶい褐色を呈する。外面胴部には炭化物が付着する。	
3	5—A ₁	大形の波状を呈し、胴部で強く括れる深鉢形土器である。胴上半部のみ現存している。口径推定22.5cmを測る。口縁に平行した2条の沈線区画に原体RLによる縄文が施され、それが2帯平行して描出されている。波頂下には指頭圧痕を有する縦長の瘤が貼付され、文様を分割している。また、縄文帯上には縦位に刻目の入った瘤が付される。胴部括れ部には帯状に縄文帯が巡る。	胎土、焼成同上。色調黒色を呈する。	
4	5—A ₂	ロ縁が内傾し胴上半が膨らんだ深鉢形土器である。72図2とほぼ同様の形状を示している。推定口径28.5cmを測る。胴上半には沈線で区画した3帯の隆起縄文帯が巡っている。また、破片であるため単位は明確でないが口縁から垂下する短い隆帯が施され、文様を分割している。胴下半部は無文となっており、左上→右下方向への荒い器面調整を認めることができる。	砂粒を多量に含む。焼成良。色 調は上半黒褐色、下半は橙褐色を 呈する。外面口縁部、内面底部付 近に炭化物の付着が認められる。	
73—1	5—A₃ — III	「く」の字状に屈曲した口縁が朝顔状に開き、胴上半で張る深鉢形土器である。推定口径21.4cmを測る。口縁から屈曲部さらに胴上半部にかけて文様がみられる。口縁は小さな連続する波状が巡る。波状に平行して2本を単位とする沈線が描かれている。一方胴上半部には2本の沈線が巡り、胴下半部の無文帯と区画している。口縁とその区画内には沈線によって三叉文、渦巻状文等が描出されている。なお、胴部に施文される区画文は安行式期では、胴部の最大径付近に施されている。残存4	胎土、焼成同上、色調黒褐色を呈する。	残存¼

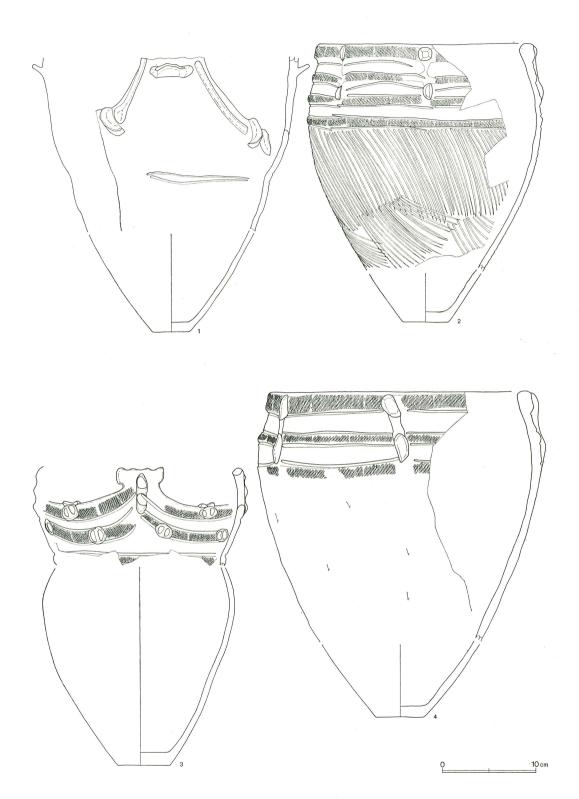
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
73— 2	5—A₂ — Ⅱ	口縁が内傾しながらもやや立ち上がりを見せている深鉢形土器である。沈線のみにより文様が描かれている。口径(推定 27.4 cm)、現存高28.5cmを測る。横長の区画文が、2段巡っている。さらに文様を分割するように横位に刻目の入った縦長の瘤が貼付される。胴上半には下向きの連弧文が描かれ、胴部無文帯と区画している。	胎土、焼成同上。色調はにぶい 橙褐色を呈する。	残存¼	
74—1	5 — C	沈線区画内に縄文が施された土器である。 瘤を文様の中心に置き、所謂玉抱三叉文のモチーフを有する土器である。原体LRによる 縄文が施されている。胴部径(推定12cm)を 測る。沈線間はナデが丁寧に行なわれ滑沢を 帯びている。	胎土、焼成同上。色調暗褐色を 呈する。		
2	5-C	口縁が外反し、胴部が球状を呈する深鉢形土器である。口径(推定23.7cm)を測る。胴部中央にはエラ状に張り出した隆帯が一条巡っている。隆起帯および隆起縄文帯によって文様が描出されている。また、エラ状の隆帯上部には縦長の刺突が施されている。なお要所には瘤が貼付される。	胎土、焼成同上。色調は明褐色 を呈する。		
3	5—D ₂	浅鉢である。口縁が内彎しており、丸味をもちながら底部に至る。口縁が楕円形を呈しており、長径部には2個の突起、短径部には1個の頂部に刻目を有する突起が貼付される。胴部には、沈線による流水文状の文様が描かれる。原体RLの縄文が、口縁部、胴中位、底部に施文される。口径は、(推定長径11.5cm、短径10cm)を測る。	黒色に光る粒子、砂粒を含む。 焼成良、色調黒褐色を呈する。		
4	5—D ₁	波状で、底面が丸味を呈する浅鉢形土器である。口径18cmを測る。波頂部は、隆帯等によって飾られており、口縁部の波状に合わせて施文された沈線区画内に原体LRの縄文が施文されている。さらに波状間は一つおきに、沈線区画間に瘤状突起や刻目のある隆起帯がつけられる。			
5	5—D ₃	口縁部が「く」の字に屈曲し、胴部でふく ちみを有する浅鉢形土器である。口径19cm、 器高9cmを測る。口縁に1本の沈線が巡り、 その直下に渦巻文と背合わせの横位の弧状沈 線が交互に描かれている。胴部との区画には 横長の刻目を有する隆起帯が巡る。胴下半に は上向きの連弧文、沈線が巡る。地文には原	砂粒を含む。焼成良。色調はにぶい黄褐色を呈する。		

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
74—6	5 — C	体RLの縄文が施文される。 □縁が内彎する桟鉢形土器かと思われる。 一条の沈線を中心として向い合った弧状の沈線文が胴部に描出されている。底部付近には 2本の沈線が巡る。	砂粒、焼成同上。色調は灰白色 を呈し、黒色斑がまだらに入る。	-	
7	5—E1	平縁を呈する土器であり、口縁部の屈曲状態から台付土器かと推察される。口径25cm。 沈線によって区画された隆起縄文帯が4帯施されている。原体RLの縄文である。以下、 条線によるモチーフが描出されている。	砂粒を少量含む。焼成良。色調 黒褐色〜灰褐色を呈する。		
8	5-E	台付土器の一部である。屈曲部には縦位の 刻目が施された隆起帯が巡る。	砂粒、金雲母 粒 を 含 む。焼成 良。色調は淡褐色を呈する。		
9	5—D ₆	無文の椀状を呈する土器である。底部はあげ底を呈するものである。口径 $19\ cm$ 、底径 $6.4\ cm$ 、器高 $11\ cm$ を測る。 口縁部付近は、右 \rightarrow 左、胴部には左上 \rightarrow 右下方向への器面調整がなされている。	砂粒を多量に、小石粒を少量含む。		
10	5-F	注口土器であり、口縁部付近を欠く。胴部中位に原体LRの縄文を地文として、3本を単位とする沈線が巡っている。他は、無文である。底部には網代痕を有する。	砂粒を含む。焼成良。色調はに ぶい黄橙色を呈する。		
11	5 — D	底部を欠くため明確でないが、浅鉢ないし皿状を呈する土器である。口径(推定20cm)を測る。口縁部に小突起を有するもので、器面は無文の土器である。右下→左上への器面調整がなされている。	胎土には黒色、白色の砂粒を含む。焼成は良好である。色調黒褐色を呈する。		, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
75—1	4—A4	ロ縁でやや外反し、胴上位で軽く括れる、 平縁の深鉢形土器である。口径20cm、現存高 15.5cmを測る。器面全面に、左上→右下の条 線が粗く縦位に施文される。一部に、条線を 分割するように沈線が垂下している。	小石粒を多量に含む。焼成良。 色調灰白色を呈する。		
2	5—A ₅	口縁部はやや内傾し、胴上半でわずかに膨 ちみ、緩やかに底部に至る平縁の深鉢形土器 である。口径25cmを測る。所謂紐線文系の土 器であり、口縁と胴上半に列点による紐線文 が表現されている。地文は上位では縦位の条 線が、さらに下半には右下→左上への条線が 施文されている。	胎土に砂粒を含む。焼成良。色調は黒褐色を呈する。内面下半に炭化物の付着が認められる。		
3		口縁がやや内傾し、胴上半でやや張りをも	黒色に光る粒子、白色粒子、砂		

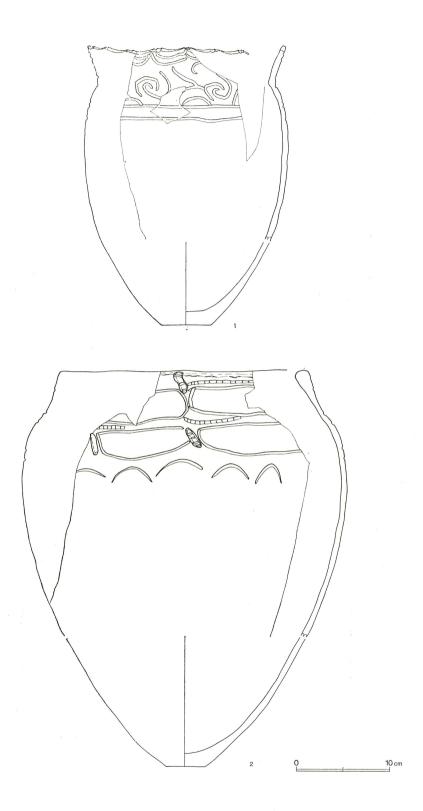
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
		ちながら底部に至る平縁の深鉢形 土器 である。口径20cmを測る。口縁と胴上半には刻目文による紐線文が巡る。紐線文は沈線により区画されている。紐線文間には斜行する条線が施文される。胴部の条線は浅く一部に施文されている。	粒を含む。焼成良。色調明黄褐色を呈する。		
75— 4	5—A ₅ — I	口縁が直線的に開く、深鉢形土器である。 口縁内側には、段を有する。口縁と胴上位に は刻目を施文した粘土紐が巡る。紐線文間に は横行する条線が施文され、分割するように 縦位の沈線が2本描かれている。胴部は斜行 する条線が施文される。地文には浅く縄文が 施文される。	砂粒を含む。焼成良、色調は淡 橙色を呈する。		
5	5—A ₅	口縁が内彎する平縁の深鉢形土器である。 竹管による押引を有する粘土帯が 貼付 される。地文に横走する条線を施文し垂下する沈 線により分割し、一つおきに磨消したもので ある。全体に滑沢を帯びている。	砂粒をやや多く含む。焼成良、 色調赤褐色を呈する。		
6	5—A ₅	口縁が直立する平縁の深鉢形土器である。 口縁部には棒状工具による押圧をもつ粘土紐 が貼付される。横行する条線が縦位に施文さ れる。	砂粒、黒色に光る粒子を多量に 含む。焼成良。色調明褐色を呈す る。		
7	5—A ₅ —∭		胎土、焼成同上、色調淡橙褐色を呈する。		
76— 1 ~ 4 77— 1 • 2	5 — A_6	無文の深鉢土器である。76—1~4は、口縁が内傾し、胴上半でやや張りをもちながら底部に至る。1は口径25cm、現高43cm、2は口径(推定43cm)、現高38cm、3は口径(推定30cm)、現高23.5cm、4は口径36cm、現高29cmを測る。1は口唇部が肥厚しており、口縁部は横位の、胴部上半は右下→左上への、胴部は縦位の器面調整が成されている。3は縦位の器面調整が行なわれている。4は口唇部が内側にそがれた様な形態をしており、口縁部では横位の胴部では縦位の器面調整が成されている。77—1は直線的に開く器形を呈している。口唇部がやや肥厚している口径(推定37cm)、現高35cmを測る。2は口縁部が内彎し、胴部で脹る。口縁部の外側に粘土を折り返している。口径22cm、現高19 cm を測			

	1 1			144
番号	分類	器形・文様の特徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
×		る。口縁部は横位の、胴部には縦位の器面調整が成されている。		
$78 2 \sim 8$ $79 1 \sim 10$ $78 1$		底部を一括した。78-1、4、5、6、78は網代痕を有する。78-1は屈曲部に原体LRの縄文が施文され、瘤が貼付される。24・5は条線が施文されている。3は2本単位の沈線が横走し、地文に原体Lの無節の縄文が施文される。他は無文である。内面に炭化物の付着が認められるものが多い。	胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。色調。78-1は黒褐色、2・4・5、79-8は灰黄褐色を呈する。79-1、4はにぶい赤褐色他は明褐色を呈する。	
80—1	4-C	口縁が内傾しながら開く浅鉢形土器であろう。口唇部に刻目を有し、口縁部は一条の沈 線が巡る。	胎土・焼成は良好である。色調 は明灰黄色を呈する。	
2	4-D	沈線間に原体RLの縄文が施文される。	黒色の砂粒を含む。焼成良。色 調。灰白色。	
3	5 — F	注口土器であろう。渦巻状の文様が施文される。	胎土・焼成良。色調暗褐色を呈す る。	,
4	5—A ₂ — [口縁に竹管状工具による集合沈線が横方向 に施文される。口唇部には、縦長の瘤が貼付 される。口縁には地文に縄文が施文される。	胎土・焼成良、色調黒褐色を呈 する。	
$6 \sim 8$	5—A ₁ — I 5—A ₁ — IV		胎土・焼成同上。色調。5、9 10は明褐色を呈する。他は褐色を 呈する。	
11 • 12	5—A ₁	幅広の沈線区画内に縄文RLが施文され、 横長の縦位に刻みをもつ瘤が配されている。	胎土・焼成同上。色調は明褐色 を呈する。	
13 • 14 17	5—A ₂	平縁の深鉢形土器で、沈線により区画された3帯の縄文帯が施文されるものである。13は縦長の瘤が貼付られる。14の縄文帯間は研磨されており、縦長で横位の刻目が施された瘤が貼付される。	胎土・焼成良、色調は明褐色を 呈する。	
15	5—A ₃	横位の弧線を描き縄文を施文したものである。沈線間には三叉文が描出される。口縁部 には瘤が貼付される。	胎土に砂粒を含む。焼成良、色 調灰褐色を呈する。	,
16	5—A ₂ — I	2帯の隆起縄文帯が巡り、間はナデられる。	胎土•焼成•色調同上。	
81—1	5—A ₂ — I	沈線間に原体LRの縄文が施文される。	胎土・焼成良。色調褐色を呈す。	

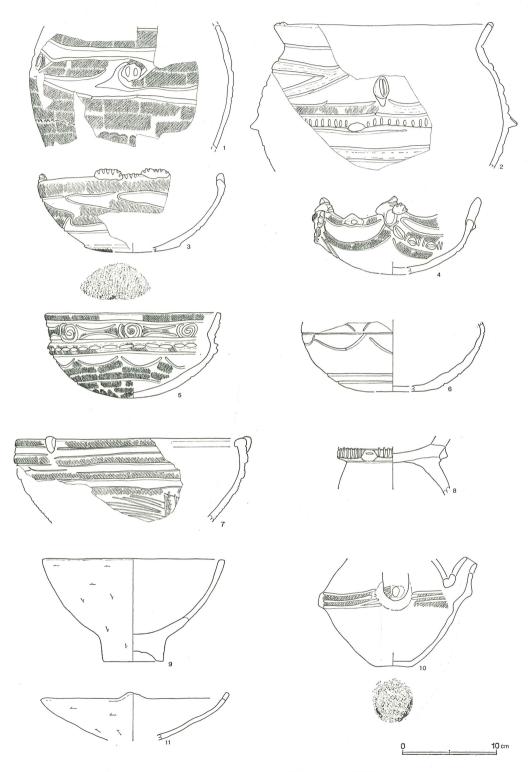
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
81— 2	5—A	口唇部に指頭圧痕が認められるものである 口縁部には原体RLの縄文が施文される。	胎土・焼成良。暗褐色を呈す る。	
3	5—A ₃	沈線で区画された口縁部に原体Lの縄文が 施文される。下部には弧を描く沈線を有する。	胎土・焼成同上。色調にぶい褐 色を呈する。	
4	5 — A	沈線により横位の文様が描かれたものであ る。	胎土・焼成良。黒色を呈する。 表面に炭化物が付着する。	
5	5 — A	沈線区画内に施された横位の綾杉文が 2 帯 巡るもの。口唇部には突起を有する。	胎土・焼成良。色調暗灰黄色を 呈する。	
6	5 — A	沈線により工字状文が描かれる。	胎土・焼成良。黒色を呈する。	
7	5—E 2	口縁が大きく外反する。隆起縄 文帯 が 巡り、間に斜位の沈線が施文される。要所には刻みをもつ瘤が配される。台付土器と推察されるものである。		. ,
8	5—D ₂	口縁端部が強く外反する。浅鉢土器と推察される。口縁部には三叉状文を描く。胴部は2本の沈線内に縄文LRが施文される。無文部は磨かれ滑沢を帯びている。	色調は表裏面黒色を呈し、内部は	
9	5—В	口縁部に沈線が巡り、把手の部分は貫通し ている。小形甕と思われる。	砂粒を多く含む。焼成良、色調 は暗褐色を呈する。	
11	5 — A	角底土器である。底には瘤が貼付される。	胎土・焼成良、黒褐色を呈する。	
	5—A ₅ 5—A ₅	紐線文系の土器である。 $81-9 \cdot 11 \cdot 13$ 、 $82-1 \cdot 8 \sim 10$ 、 $83-2 \sim 6$ は沈線と列点によって紐線文が表現され、他は、粘土紐を貼付し、表面を半截竹管様工具により押捺したもので表現されるものである。 9 くのものは地文に条線が施文されるものである。 $81-10$ 、 $82-7 \cdot 10$ 、 $83-1 \cdot 2$ は、紐線間に同手法による斜位及び弧状文が描かれる。 $82-8$ は区画内に縄文が描かれる。 8280 の土器の地文は無文となっており、口縁部付近はよくナデられているものである。	9は砂粒を含み、色調は褐色を呈する。11・13はにぶい黄褐色を呈する。10は黒色に光る粒子、小石粒を含み、色調はにぶい黄褐色を呈する。82-1~8・10、83は砂粒を多量に含み、色調は、まだら	1は同一個体
81—12	5-E	台付土器の台部である。無文を呈している。	胎土・焼成良好。色調灰褐色を 呈する。	
84—	5—A ₅	器面に浅い条線が施文されるものである。 1は口唇部がやや肥厚し、その下に左上→右 下に斜走する条線が施文されるものである。	砂粒を含む。焼成は 良 好 で ある。色調は1が明褐色。2が黒褐色を呈する。	



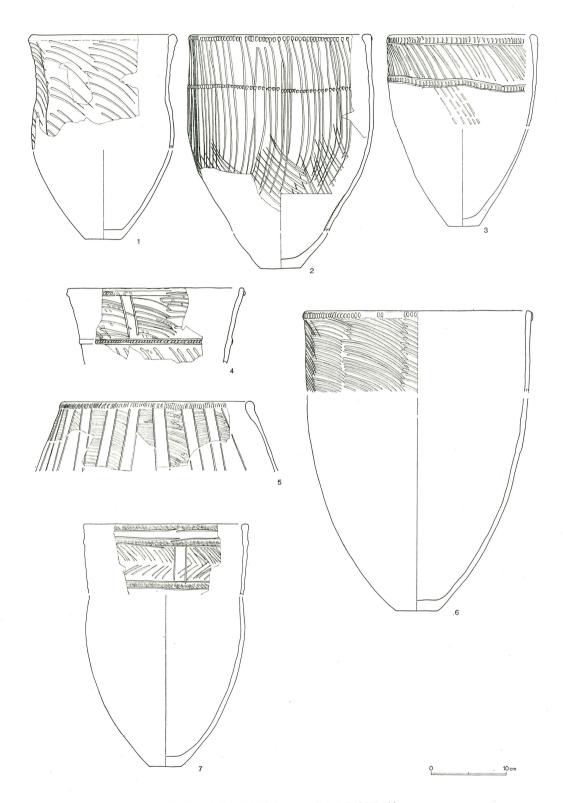
第72図 伊奈氏屋敷跡 I-4 区出土土器実測図(1)



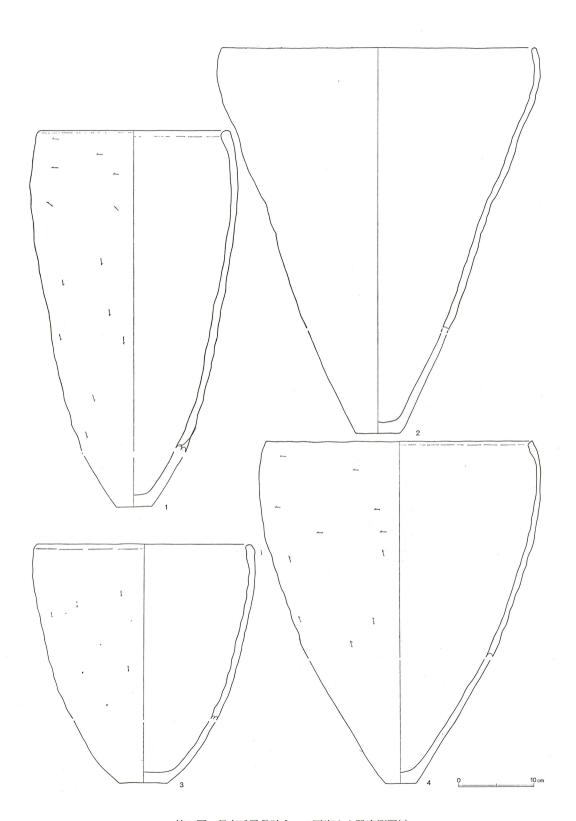
第73図 伊奈氏屋敷跡 [一4区出土土器実測図(2)



第74図 伊奈氏屋敷跡 I — 4 区出土土器実測図(3)

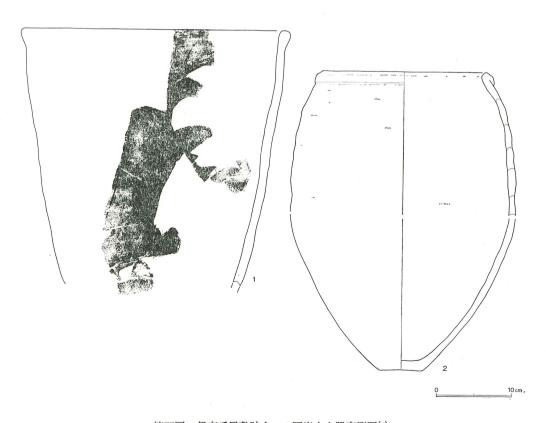


第75図 伊奈氏屋敷跡 [— 4 区出土土器実測図(4)

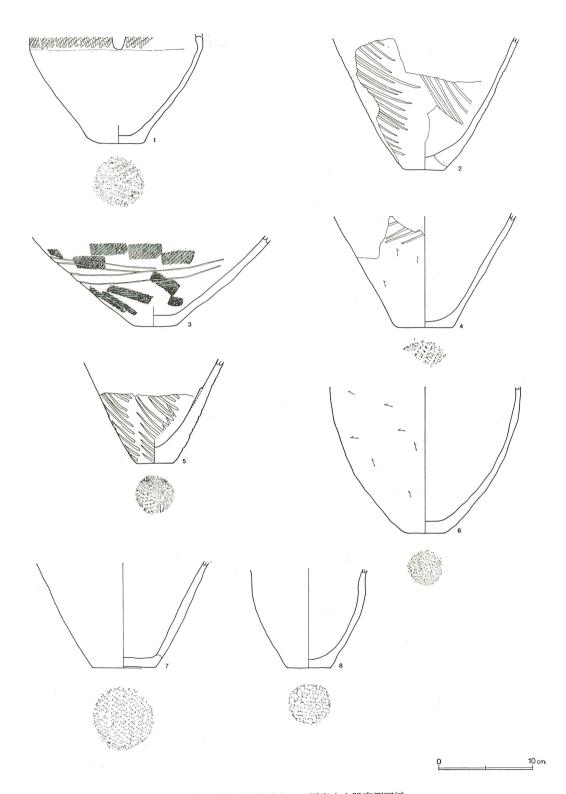


第76図 伊奈氏屋敷跡 [一4区出土土器実測図(5)

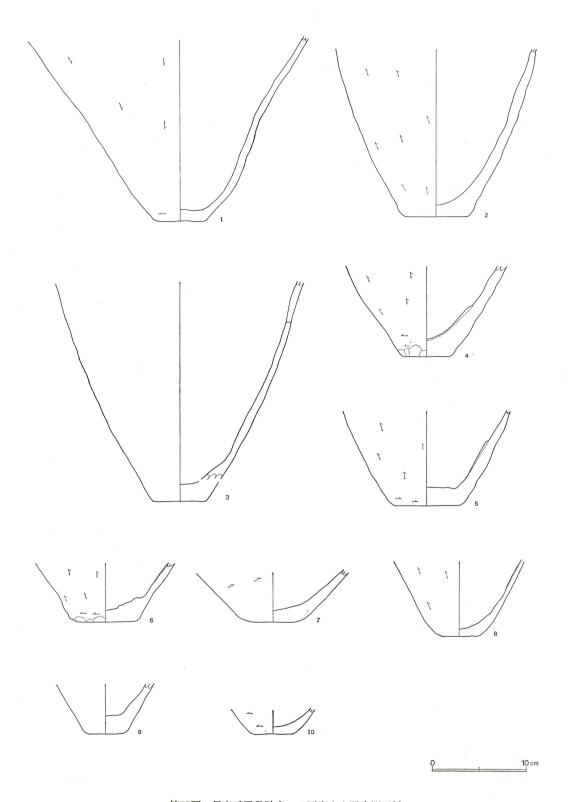
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
		2は、口縁直下より、左上→右下へ密な条線 が施文され、その下部には縦走する条線が認 められる。			
84— 3~5 9	5—A ₆ — [V	無文の土器である。 口縁が内彎する器形を呈し、口唇部は肥厚 しないものである。外面は荒く器面調整が行なわれ、内面は丁寧に調整される。	胎土には砂粒・小石粒を含む。 焼成は良好である。3は暗褐色を 呈する。4・9は黒褐色を呈す る。5は明黄褐色を呈する。		
84— 6 ~ 8 10	5—A ₆	無文の土器である。口縁部が外側に折りかえり、段を作出しているもの。7は折りかえし部に指頭圧痕が施文される。			
11	5—A	底部付近の土器である。上端には棒状工具による沈線が一条巡る。地文は、原体RLの 縄文が、密に施文されている。	胎土には黒色に光る粒子を含む。焼成良。色調暗褐色を呈する。		



第77図 伊奈氏屋敷跡 [— 4 区出土土器実測図(6)



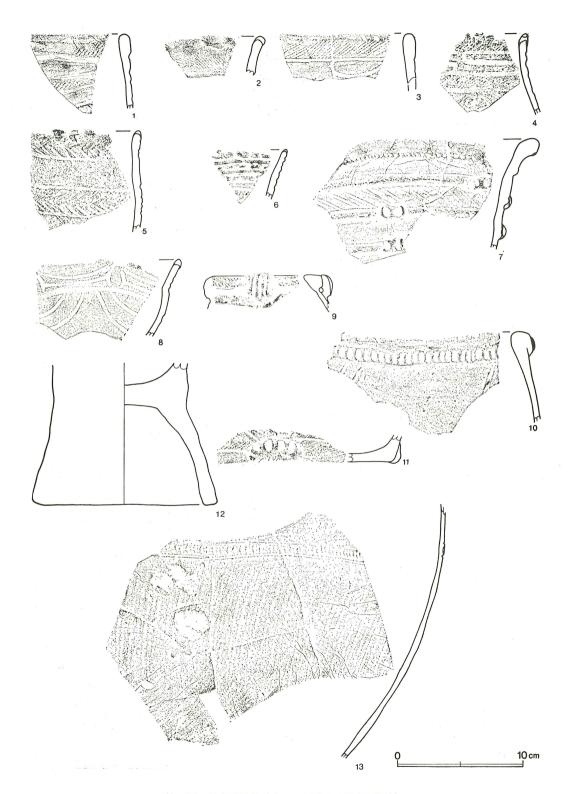
第78図 伊奈氏屋敷跡 [一4区出土土器実測図(7)



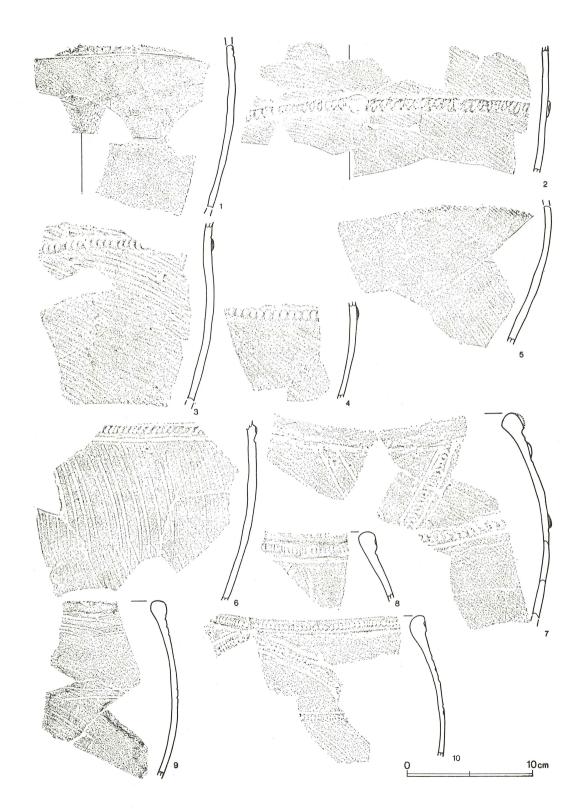
第79図 伊奈氏屋敷跡 I — 4 区出土土器実測図(8)



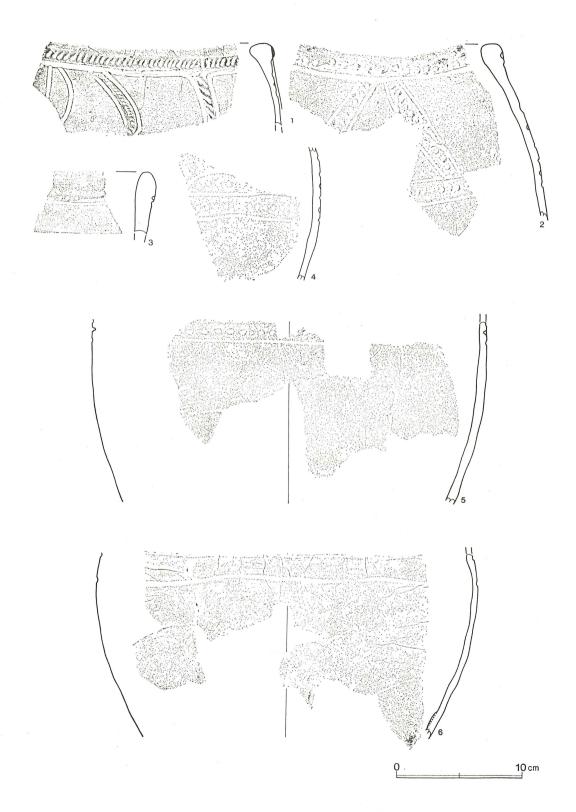
第80図 伊奈氏屋敷跡 [— 4 区出土土器拓影図(1)



第81図 伊奈氏屋敷跡 I — 4 区出土土器拓影図(2)



第82図 伊奈氏屋敷跡 [— 4 区出土土器拓影図(3)



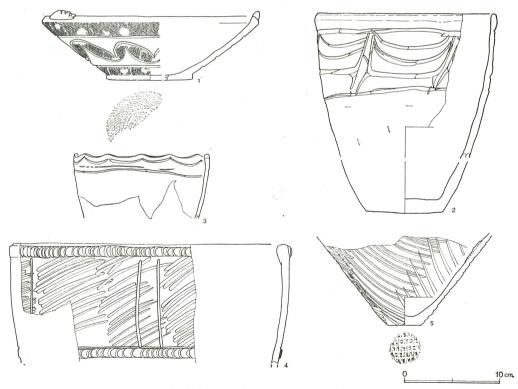
第83図 伊奈氏屋敷跡 I — 4 区出土土器拓影図(4)



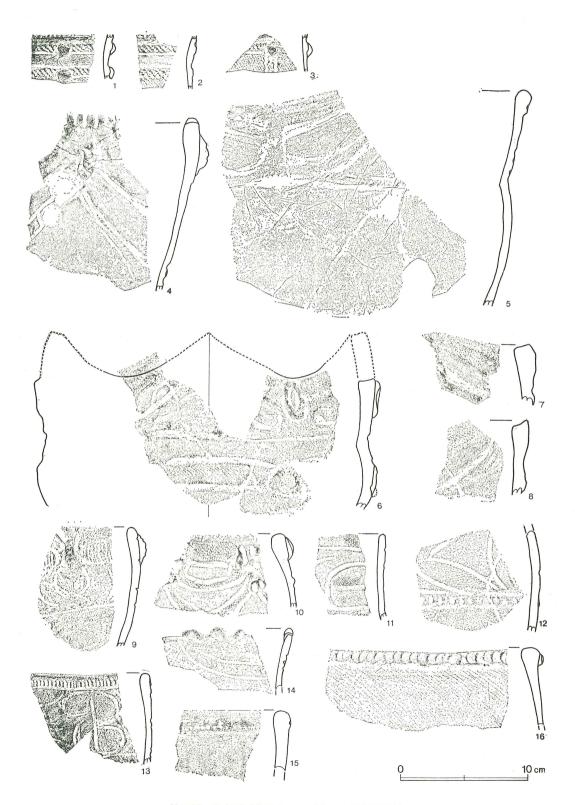
第84図 伊奈氏屋敷跡 1 — 4 区出土土器拓影図(5)

番号	分類	器形・文様の特徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
85—1	5—D ₂	口縁部が直線的に開く皿状に近い浅鉢である。口径23cm、底径9cm、器高6.5cmを測る。口唇部には刻目を有する瘤が貼付される。文様は、沈線で区画した口縁、胴部の弧状を呈した入組文内、底部に原体RLの縄文が施文されるものである。	胎土・焼成は良好である。色調 は黒色を呈する。	-
2	5 — C	口縁が直立気味に立ち上る平縁の深鉢形土器である。口径19.2cm、現高15cmを測る。沈線で文様が施文されるものである。口縁に2本の沈線が巡り、2本単位の垂線で縦位に分割し、弧線が施文される。6単位を呈する。	砂粒をやや多く含む。焼成良。 色調黒褐色を呈する。	
3	5—A ₇	口縁部が小波状を呈する小形深鉢形土器である。口径15cm、現高16.8cmを測る。口縁に平行して波状に沈線が巡り、さらに胴部との分割のために2本の沈線が巡る。地文は無文である。	砂粒を多量に含む。焼成は普通 よりやや劣る。色調両面共に黒色 を呈する。	
4	5—A ₆	口縁がやや内傾する。紐線文系の深鉢形土器である。口径30cmを測る。口縁部には2帯粘土紐を貼付し、刻目文を施している。さらに縦に分割するために平行垂線が施文される。地文には左下→右上の条線が施文される。	砂粒を多量に含む。焼成良。色 調灰褐色を呈する。	
5	5—A4	底部の土器である。地文には斜走する条線 が施文される。単位は5単位である。底部に は網代痕が施文される。	砂粒を多量に含む。焼成はやや 悪い。色調は灰白色を呈する。	
86—1 ~3	5 — A	薄手の土器である。2帯の隆起縄文帯が巡り沈線によって区画されている。要所には瘤が貼付される。下半には瘤下に平行な蛇行垂線が描かれる。地文に条線が施文される。	砂粒を含む。焼成良。色調にぶ い赤褐色を呈する。	同一個体である。
5 • 4	5—A ₁ — [V	口縁が直立し、胴部で張る。波状の深鉢形 土器である。波頂・底部には縦長で横位の刻 目を有する瘤が貼付される。文様は、隆起帯 刻文が口縁及び括部に巡り、波頂部では三角 状に区画される。	砂粒でザラ付く。焼成はやや悪い。色調はにぶい黄橙 色 を呈する。	
6~8	5—A1 — [V	口縁が内傾し、胴上位で括れる。波状の深 鉢形土器である。口縁に縦長で縦位の刻目を 有する瘤が貼付される。文様は隆起縄文帯に より描かれ波頂下では三角状に区画される。	砂粒を多量に含む。焼成良、色 調は黒褐色を呈する。	同一個体である。

-				
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
9 • 13	5—A4 — I		胎土・焼成同上・色調は黒褐色 を呈する。	
10	5 — F	隆起縄文帯が口縁及び弧状に描かれる。各 所には瘤が貼付される。	胎土・焼成同上、色調にぶい黄 橙色を呈する。	,
11	5—A ₃	2帯の縄文帯間に、弧線文が描かれ区画内 に縄文が施文される。	黒色に光る粒子を含む。焼成 良。色調は黒色を呈する。	
86—16 87— 1 • 2	5—A ₅	紐線文系の土器である。86—16は粘土紐を 貼付し、その上に刻目を加えたものであり、 87—2は弧線が描かれている。	胎土・焼成同上。色調は86—16 が明橙褐色、他は黒褐色 を呈す る。	
86— 14 • 15		沈線と刺突により文様が描かれている。	胎土・焼成良好、黒褐色を呈する。	
87— 3 ~ 6 8 • 9	5—A ₆ —∭	ロ唇部が肥厚した、内彎する土器である。 ロ縁に段を有し、横位の沈線が描かれる。	砂粒を多量に含むが、焼成は良 好である。色調にぶい黄橙色。	4・5・6・ 9は同一個体
87— 7 • 10 11		無文の土器である。10は口縁が「く」字状 に括れている。	胎土・焼成同上。色調は、11同 上。10は暗褐色を呈する。	



第85図 伊奈氏屋敷跡 [— 5 区出土土器実測図



第86図 伊奈氏屋敷跡 [一5区出土土器拓影図(1)

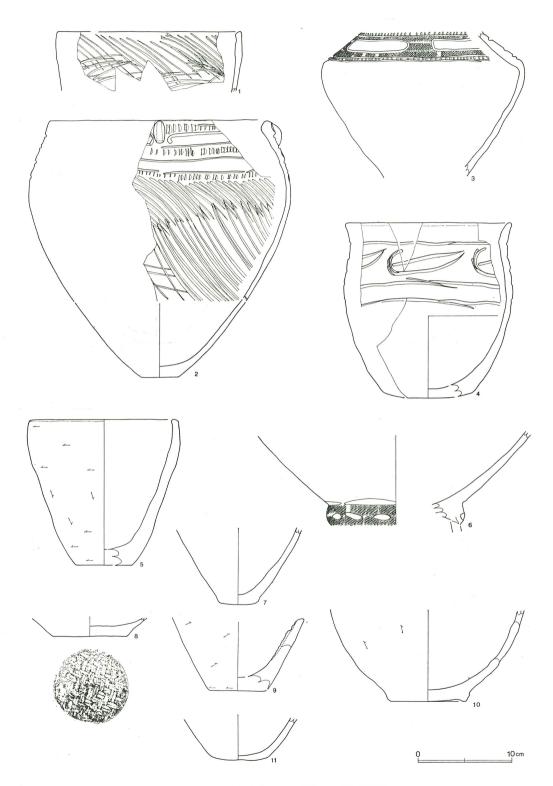


第87図 伊奈氏屋敷跡 I — 5 区出土土器拓影図(2)

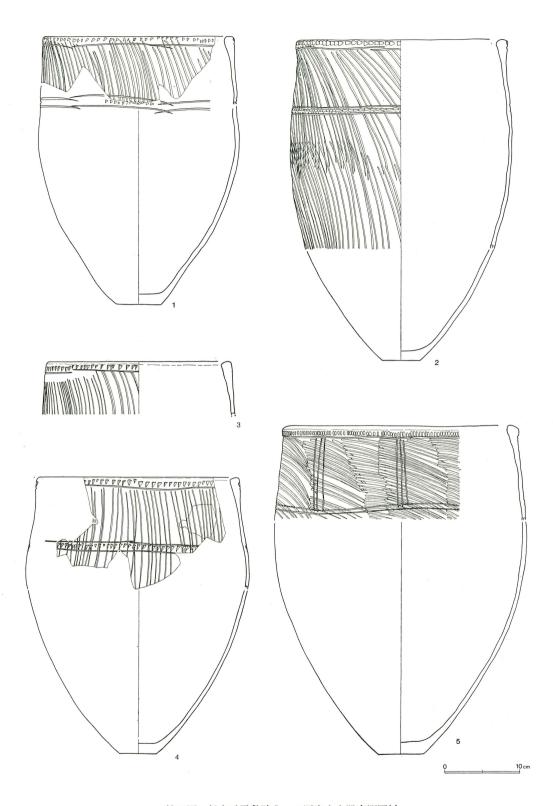
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土• 焼 成• 色 調 等	備考
88—1	4—A4	口縁がほぼ直立する平縁の深鉢形土器である。口径(推定20cm)を測る。口縁の内側に一条の沈線が巡る。文様は綾杉状沈線が施される。施文順位は基本的には上からである。	砂粒をやや多く含む。 焼成 良好。色調外面浅黄色、内面暗灰黄色を呈する。	
2	5—A2	口縁が内彎し、胴上半で脹らみ小さな底部 に至る平縁の深鉢形土器である。口径(推定 24cm)を測る。3帯の沈線と列点による紐線 文が口縁に巡る。口縁部には縦長の瘤が貼付 され、横走の沈線が垂下し枠状文を作ってい る。胴部には斜行する条線が施文される。	黒色に光る粒子、砂粒を含む。 焼成は良好である。色調は黒色〜 褐色を呈する。	
3	4-B	胴部で「く」字状に屈曲する算盤玉状の形態をした、甕形土器である。括れ部と胴部屈曲部とに2条の横線にはさまれた刻み目が巡り、間には横長の枠状文が描かれている。地文に原体LRの縄文が施文され枠内は磨消されている。胴部はナデられており無文である。	砂粒を含む。焼成は 良 好 で ある。色調は外面は黒色、内面は灰 黄褐色を呈する。	
4	5-C	口縁が「く」字状に屈曲し、胴部がやや張る、平縁の鉢形土器である。屈曲部と胴中位に沈線が巡り、その間に弧線文が5単位描かれている。胴部は無文である。	砂粒を少量含む。焼成は良好、 色調は黒褐色を呈する。	
5	5-C	口縁が直立し、直線的に底部に至る平縁の 鉢形土器である。口径16cmを測る。無文土器 であり、口縁部及び底部付近は横位の胴部は 縦位の器面調整が行なわれている。	砂粒をやや多く含む。焼成は普通である。色調灰褐色を呈する。	
6	5-E	台付土器の接合部である。接合部には原体 LRの縄文が施文されており、13個の刻目が 配されている。さらに赤色の顔料が塗られて いる。	胎土、焼成は良好である。色調 は暗褐色を呈する。	
7 } 11	5 — A	底部の土器である。8には底面に網代痕が認められる。10の底部は高台状を呈している。	砂粒、小石粒を含む。焼成は良好である。色調は8が黒色、他は にぶい黄褐色を呈する。	
89— 1 ~ 4 89— 5	5—A ₅ I— 5—A ₅ — I	組線文系の土器である。口縁部が内傾し、 胴部でやや脹らみ、ゆるやかに底部に向う深 鉢形土器である。口径1は26cm、2は28.5cm 現高28cm、3は25cm、4は27cmを測る。5は 口径32cmを測る。1~4は口縁及び頸部に刻 目文が配されたものである。刻目文は沈線で 区画がなされている。地文は斜行、垂下する	共に砂粒を含み、焼成は良好である。色調1はにぶい褐色、2は 黒褐色、3は黒褐色、4は橙色、 5は黒褐色を呈する。4は部分的 に炭化物が付着している。	,

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
	-	条線が全面に施されている。5は口唇部に刻目が巡っており、それを区画する沈線が1条、頸部に2条巡りその間を分割する3本単位の平行沈線が垂下している。地文には横走条線が施文される。		
	π	胴上位で張り底部に至る平縁の深鉢形土器である。口径23.8cm、現高32cmを測る。口唇部	いずれも砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調1は灰白色2は明灰褐色、3はにぶい黄色、4は黒灰褐色を呈する。	
91— 1 · 2	1	1は横位の条痕が施文される。2は尖底の土器である。	胎土に繊維を含むが焼成の良い 土器である。色調橙色を呈する。	
3	4—A4	口縁部がやや反る器形を呈する。棒状工具による押引文で口縁部文様帯を区画し、横位の沈線を多数巡らす、それを分割する蛇行する沈線が垂下しているものである。	MILE 200 CAP.	
4 • 5	4 — A	沈線が横位、斜位に施文されるものである。4は2本の斜行する沈線間が丁寧にナデられている。	1	
6	4 — C	口縁が直立し、胴部が屈曲し底部に至る浅鉢である。口唇部に指頭圧痕を有する。口縁 及び内面は丁寧にナデられ滑沢を帯びている。	砂粒を含む。焼成は良好である。色調、内外面共に黒色。器肉はにぶい黄褐色を呈する。器面は 黒色になるよう調整したかもしれない。	
7	4—A4	斜位に交差する沈線が施文される。	胎土・焼成は良好。色調黒色を 呈する。	
91— 8 92— 7	5 — A	口縁部に棒状工具による押引きと沈線が交 互に施文され、2対の瘤が貼付されたもので ある。地文は無文である。	小石粒を含む。焼成良好。色調 外面黒色、内面暗褐色を呈する。	91—8、92— 7は同一個体
9 • 10	4—A ₃	口縁部に縄文帯を有する。口縁及び胴上位には弧線文を描き区画内には原体RLの縄文が施文される。さらに弧線文を分割するため 頸部に棒状工具による押引と沈線が巡る。口 縁部には縦長の瘤が貼付される。	砂粒、黒色に光る粒子を含む。 焼成はやや良。色調暗褐色を呈す る。	

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土• 焼 成• 色 調 等	備考
91—11 92— 1 • 2	5—A ₂	隆起縄文帯が3帯巡るものであり。沈線により区画が行なわれている。瘤が上下に2個貼付される。胴部には斜走する条線が施文される。器面に炭化物を付着している。	胎土・焼成良好、色調黒色を呈 する。	91―11と92― 2 は同―個体
92— 3 • 4	4 — A	ヘラ状工具により、三角文状の押引文を巡らし、下部は2本の曲線内に縄文を施文する。無文部はナデられている。	胎土・焼成、色調同上。	
5	4-A	口縁部下に隆帯が巡り、以下沈線が施文され、縄文が磨消されたものである。	胎土・焼成良。色調黒褐色を呈 する。	
6	5	隆起縄文帯が弧状を呈するものである。中 位には縦長の刻目を有する瘤が貼付される。	胎土・焼成良。色調内外面暗褐 色、器肉は明黄褐色を呈する。	
8	5-E	台付土器の台部である。2本の沈線間には 原体RLの縄文が施文される。	砂粒を含むが焼成は 良 好 で ある。色調黒褐色を呈する。	
9	5 — C	上部で屈曲し、小さな底部に至る注口土器である。横走の沈線区画内にRLの縄文が施文される。屈曲部には縦長の刻目を有する横長の瘤が貼付される。	砂粒を含むが焼成は 良 好 で ある。色調内外面共に黒褐色を呈する。器肉は暗灰色を呈する。	
10	5 — F	注口土器の注口部である。	胎土•焼成良、色調明黄褐色。	
$ \begin{array}{c c} 93 - \\ 1 \sim 8 \\ 9 \cdot 10 \end{array} $	5—A ₃ — I 5—A ₅ — I 5—A ₅	紐線文系の土器である。 口縁部及び胴部には沈線区画内に列点を有する紐線文が巡る。地文には斜走する条線が施文される。いずれも平縁を呈する深鉢形土器である。92—11は口縁はほぼ直な立ち上りを示し、口唇部が内側に肥厚している。若干胴部が膨らみをもつ薄手の土器である。93—1もそれとほぼ同様である。93—5及び9・10の土器は縦位に2本ないし4本の沈線が垂下しており、それによって文様を分割している。口唇部は他の土器と異なり外側に肥厚している。	胎土には砂粒を多量に含む。焼成は良好である。色調は93-2・3・5は黒色を呈する。他は暗褐色を呈する。	同一個体であ
93—11	5—A₅ —∭	口縁が外反する深鉢形土器を呈すると思われる。沈線区画内に縄文が施されており、曲線的な文様構成を持つ土器である。口縁部には円形状の列点が巡る。	砂粒を多量に含むが焼成は良好である。色調は褐色を呈する。	
$94 - 1$ $2 \sim 5$ $95 - 2$ 4	— I	無文の土器である。95—4以外は深鉢形土器と思われる。1は口縁の内傾する土器である。口唇部は内側に肥厚している。2は外側に折返して段を有している。95—4は、胴部が「く」の字状に屈曲している。注口土器か	胎土・焼成同上。色調は94-2 ・5、95-2・4はにぶい黄橙色 を呈する、他は褐色を呈する。	

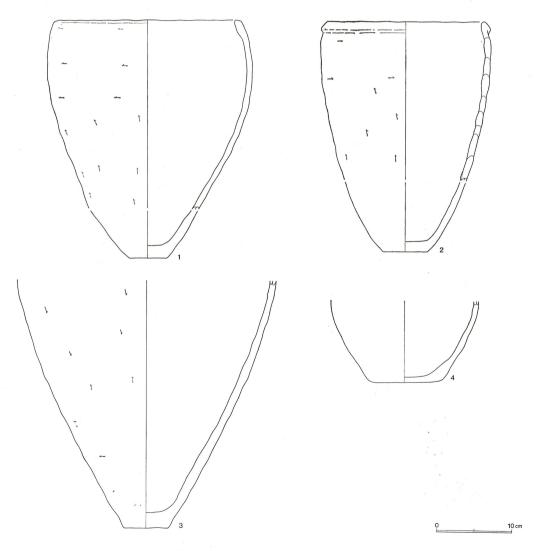


第88図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器実測図(1)



第89図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器実測図(2)

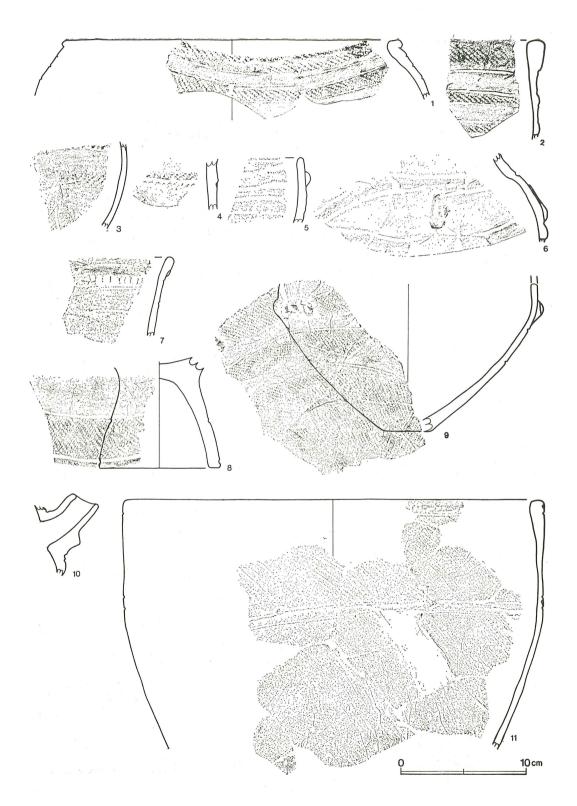
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
		もしれない。	*		
94— 6		口縁がやや内傾する土器で胴部に2本の沈線が巡り口縁部文様帯と区画している。口縁の文様帯は縦位に細かく分割されており、区画内には一部に縦位の綾杉状沈線が描かれる	黒色に光る粒子を含む。焼成は 良好である。色調黒色を呈する。 器面に炭化物が付着している。		
94-7. 8 95—1		ロ縁が折返され外側に肥厚している。胴部 は沈線によってモチーフが描かれる。	砂粒を多量に含むが焼成は良好 である。色調褐色を呈する。		
95— 3		小形の壺形土器である。沈線が 胴 部 に 巡る。	胎土・焼成同上。色調褐色を呈 する。		



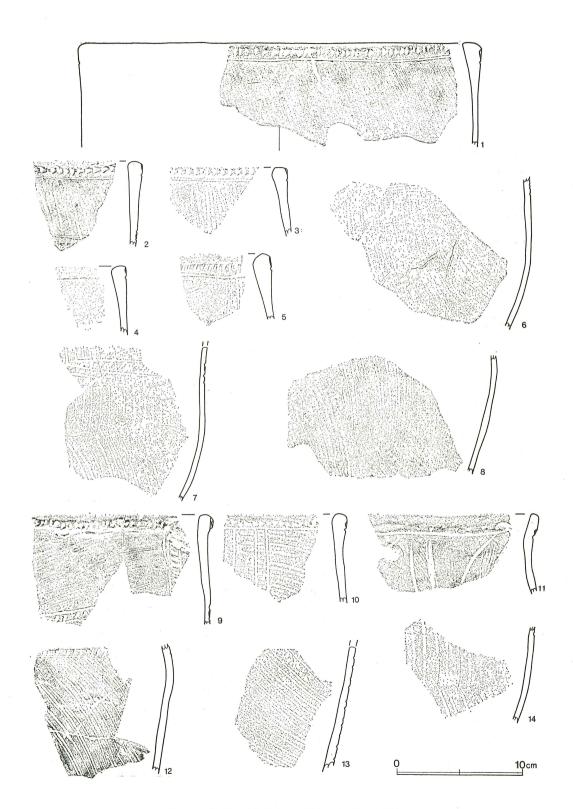
第90図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器実測図(3)



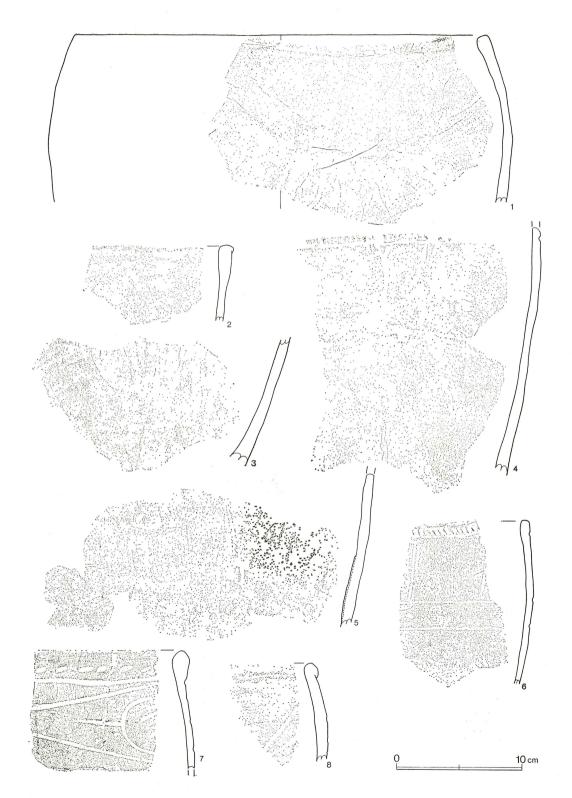
第91図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器拓影図(1)



第92図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器拓影図(2)



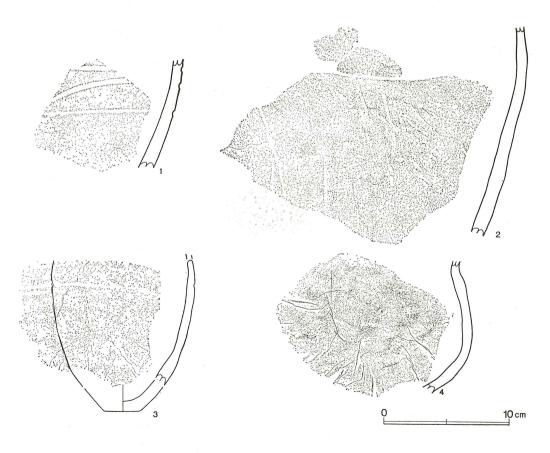
第93図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器拓影図(3)



第94図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器拓影図(4)

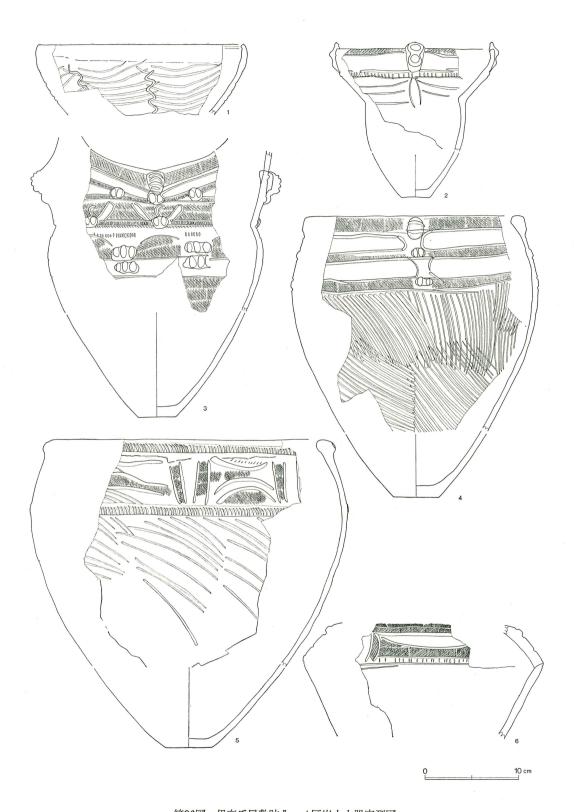
Ⅱ -4区(第96~98図)

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
96—1	4—A4	口縁部がほぼ直立し、胴部中位から朝顔状に開く深鉢と考えられる。口径22.5cmを測る。口縁部の内側に、沈線が1条巡るものである。口縁部に無文帯を有し、胴部には棒状工具により、横位の弧線文が数条施文され、さらに蛇行する垂線が分割している。口縁部及び内面は丁寧にナデられており、滑沢を帯びている。			
2	4—A1	口縁部が直上し、胴上位で括れ、胴部で張る平縁の深鉢形土器である。口径 17 cm を 測る。口縁屈曲部には 2 本の沈線が巡り、区画	砂粒を多く含むが、焼成は良好 である。色調黒色〜灰黄褐色を呈 している。口縁部には炭化物が付		

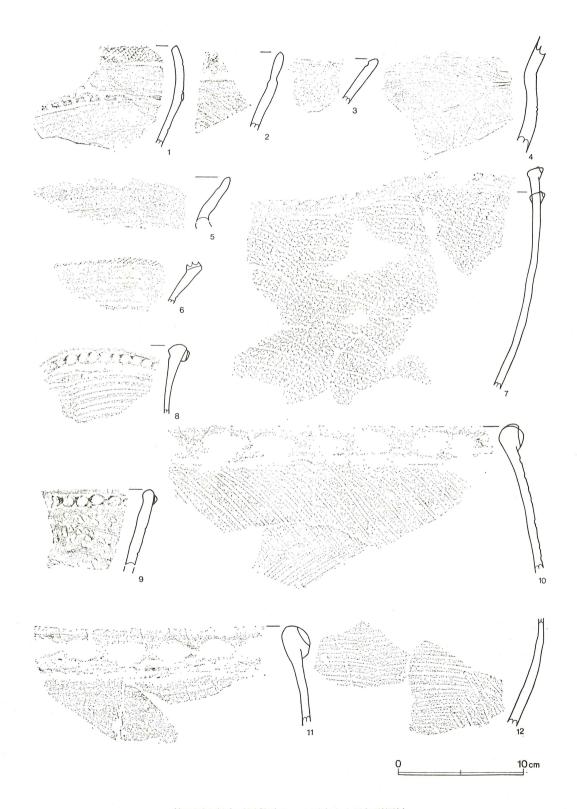


第95図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区出土土器拓影図(5)

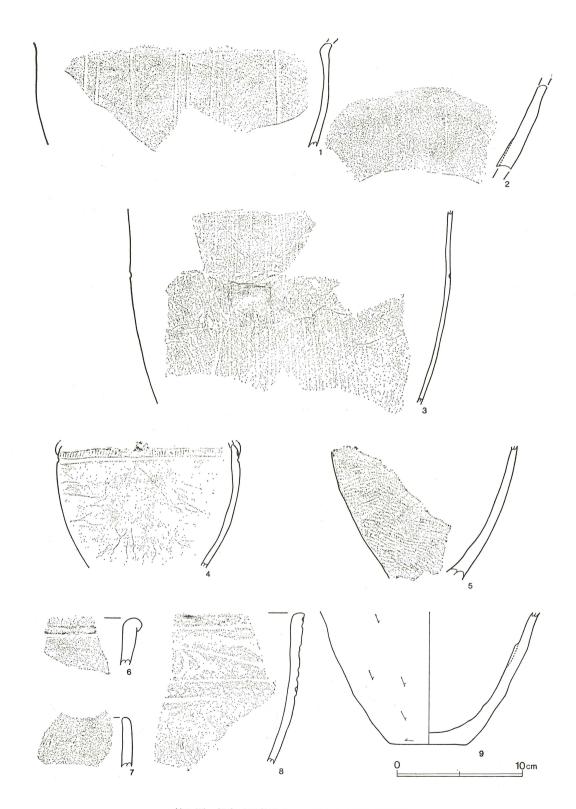
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
		内には刻目が施文され、胴部と分割している。口縁部上半には横位の沈線が描かれ、原体LRの縄文が施文される。また円形圧痕を有する瘤が貼付される。胴部には上向きの弧線文が3条描かれている。弧線連結部には縦位の向いあった弧線文が描かれている。器面内外共に丁寧に整形し滑沢を帯びている。	着している。	
96— 3	5— A₁ — II	口縁がやや外反し、胴上位で一度括れ、胴部でやや張り小さな底部に至る波状口縁の深鉢形土器である。4単位を呈する波底部分の土器である。隆起縄文帯が口縁に施文され、胴上位括れ部までには隆起帯刻文と瘤によりモチーフが描かれる。括れ部上部には原体R	胎土・焼成は良好である。色調 は黒色を呈する。	
		Lの縄文が施文され、その上から2本1対の 斜行沈線やわらび手状の曲線が描かれる沈線 内は磨消されている。胴部には下向きの弧線 文及び2本の沈線が巡り、区画内には原体R Lの縄文が施文される。連結部には純位の棒 状工具による押圧を有する横長の瘤が施文される。		
4 !	5— A ₂ — I	口縁が内彎し、胴部で張る。深鉢形土器である。口径(推定24cm)を測る。胴上半には3帯の隆起縄文帯が巡る。1帯目には横位の刻目を有する縦長の2・3帯目には縦位の刻目を有する横位の瘤が貼付される。瘤をつなぐ平行沈線間は縦位に結ばれ、枠状文を構成している。原体RLの縄文が施文される。胴部には、縦走・斜走する条線が施文される。	黒色に光る粒子、砂粒を含むが 焼成は良好である。色調は黒褐色 〜明褐色を呈する。	
5 !	5— A₅ — III	口縁が内彎し、胴部で張る、平縁の深鉢形 土器である。口径(推定32cm)を測る。口縁 及び胴上位には粘土紐を貼付し竹管状工具に よる押引きを施したものが巡る。紐線文間に は、2対の平行垂線、背合わせの弧状線が描 かれ、沈線間には縄文が施文される。胴部に は斜走する条線が施文される。	砂粒を多く含み、焼成はやや悪い。色調は灰黄褐色~灰褐色を呈する。	
6	4—B	肩部が「く」の字状に張る、算盤玉状の形態を呈する甕形土器である。口縁が欠損するものである。文様は肩部にみられる。横位の沈線及び、上向きの弧線文が描かれ、連結部には2本の縦位の弧線文が描かれている。区画内には原体Lの縄文が施文されている。肩部には刻目を配した平行沈線が巡り、無文の	砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。	
	13 14 J	部には刻目を配した平行沈線が巡り、無文の 胴部と分割している。		



第96図 伊奈氏屋敷跡 $\mathbb{I}-4$ 区出土土器実測図



第97図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 4 区出土土器拓影図(1)



第98図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 4 区出土土器拓影図(2)

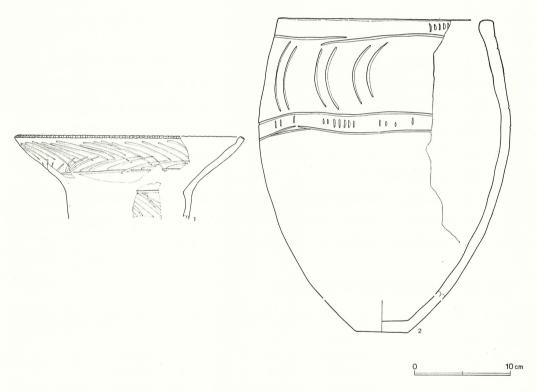
番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備考
97—1	4-C	口縁部が内彎する鉢形土器と推察される。 口縁部には原体LRの縄文が施文され、沈線 によって区画されている。下位には刻目を有 する平行沈線が巡るものである。器面は丁寧 にナデられており、滑沢を帯びている。	胎土・焼成は良好である。色調 は黒褐色を呈する。	
2	4—A4	口縁部に段を有し、口縁内側には竹管状工 具による平行沈線が巡る。地文には縄文が施 文され、その上から斜行する沈線が施文され る。	砂粒を含むが焼成は 良 好 で ある。色調はにぶい黄色を呈する。	
3	4-A4	口縁部内側に沈線が巡るものである。	小砂粒を多量に含むが焼成は良 好である。色調にぶい 黄色であ る。	
4	4 — A	頸部で屈曲し、胴部で張る土器である。胴 上部は荒い格子目文が施文される。	胎土・焼成は良好である。色調 は黒褐色を呈する。	
5~6	4-B	肩部が「く」の字状に張る、算盤玉状の形態を呈する甕形土器である。沈線区画内に原体 LRの縄文が施文される。口唇部は一部欠損しているが表面と共に炭化物が付着してる	6は黒色に光る粒子を含む。共 に砂粒は多く含む。焼成は良好で ある。色調5は黒色、6はにぶい 黄褐色を呈する。	
7~9	4—A5	7は、口縁部が内傾し、張りながら底部に至る深鉢形土器である。波状を呈する。口縁部には粘土紐が貼付され、上に棒状工具による圧痕が施文される。地文には縄文が施文され、さらにその上に斜走する沈線が荒く描かれる。8は内側に沈線が巡る。	共に砂粒を多く含む。焼成は良好である。色調は7・9はにぶい赤褐色、8はにぶい黄橙色を呈する。	
10 • 11	4—A5	口縁部が内彎している。口唇部は肥厚しており、指頭状圧痕が施されている。10は横位の綾杉状条線が、11は垂下する条線が施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調は10が黒褐色、11がにぶい黄褐色 を呈する。	
97—12 98— 1 ~ 3	4—A ₄ 5—A ₅	条線を有する胴部破片である。 $97-12$ の条線は横走しており、 $98-1 \sim 3$ は垂下している。なお $98-3$ は胴部に棒状工具による列点が巡るものである。条線は列点までまず垂下し、さらに、下半に施文したものである。	胎土に砂粒を含む。焼成は97— 12がやや悪いが他は良好である。 色調は黒褐色を呈する。	
98— 4	5-C	小形の鉢形土器と思われる。上部には、刻目を有する、2本の平行沈線が巡るものである。	胎土・焼成は良好。色調黒褐色 を呈する。器面には炭化物が付着 している。	
5	5 — A	底部付近の土器である。底面近くまで縄文 が施文されている。原体RLの縄文が施文さ れる。	胎土・焼成は良好である。色調 は褐色を呈する。	

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
98—6	5—A ₆	口縁部が外側に折返されたものであり、口 縁下は沈線状を呈する。無文土器か、あるい は口縁部の無文帯の一部である。			
7	5-C	波状口縁を呈する、小形の鉢形土器と推察 されるものである。口縁部は肥厚せずやや内 傾している。			
8	5—A4 — I	口縁がほぼ直上している。口縁部及び胴上位に列点が巡り、沈線により区画されるものであり、いわゆる紐線文系の土器である。区画内には沈線によるモチーフである斜行及び曲線が描かれ、三叉状文が施文されている。	黒褐色を呈する。表面に炭化物が		
9	5—A6	底部の土器である。 無文であり、上部は左上→右下、底部では 右→左の器面調成が行なわれているものであ る。	胎土・焼成は良好である。色調 は褐色を呈する。		

[**一4東区**(第99 ⋅ 100図)

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備	考
99—1	4—A4	胴部中位より屈曲し朝顔状に口縁が開く深 鉢形土器である。口径24.5cmを測る。平縁を 呈しており、口唇部には指頭状の圧痕を有す る。口唇部内側には一条の沈線が巡ってい る。文様は屈曲部に幅広の2本の平行する沈 線を施文し、無文部を作出し、それによって 口縁部文様を胴部文様と分帯している。口縁 部には横位の綾杉状文が、胴部には斜行する 沈線が施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調 はにぶい褐色を呈している。		
2	5—A ₅ — IV	口縁部が内傾し、胴部で張りゆるやかに底部に至る深鉢形土器である。口径23cm、現高29.5cmを測る。口縁部と同上半部には沈線で区画された列点が巡る。いわゆる紐線文系の土器である。沈線は一回で施文されず、何回かにわって施文されている。区画内には2本対の縦位の弧線文が描かれている。	砂粒を多く含み、器面に多く露 土している。焼成は良好である。 色調はにぶい黄褐色を呈する。		
100-1	4-A4	横位に沈線が巡り、下部は緩杉状の沈線が 施文されている。	胎土・焼成は良好である。色調 はにぶい黄褐色を呈する。		
2	5—A ₁	波状ロ縁の波頂部の土器である。波頂部は 突出し、逆三角形を呈している。突出部上端 には刻目を配し、縦長刻目を有する縦長の瘤	砂粒を多く含む。焼成は良好で ある。色調は黒褐色を呈する。		

番号	分類	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土•焼 成•色 調 等	備 考
		を貼付している。また口縁部には、隆起縄文 帯が施文されている。波頂下には縦長の刻目 を有する横長の瘤が、貼付されている。縄文 は原体RLである。		
100-3	5—A1	口縁部は肥厚してなく直線的である。斜位 の沈線が施文され、区画内には原体LRの縄 文が施文されている。円形の刻目を有する瘤 が貼付される。	胎土、焼成、色調同上。	
4	5—A	薄手の胴部破片の土器である。横位に3条 沈線が施文される。	胎土・焼成同上。色調は褐色を 呈する。	



第99図 伊奈氏屋敷跡 [— 4 東区出土土器実測図



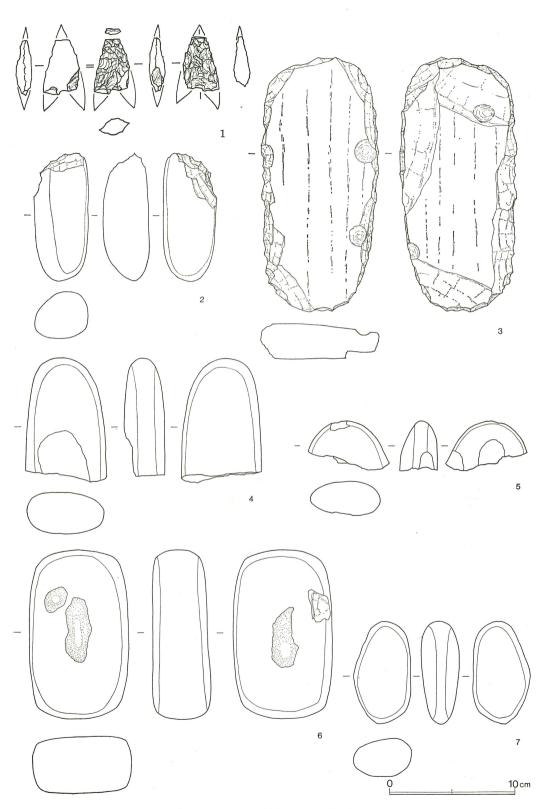
第100図 伊奈氏屋敷跡 1 — 4 東区出土土器拓影図

石器 (第101・102図)

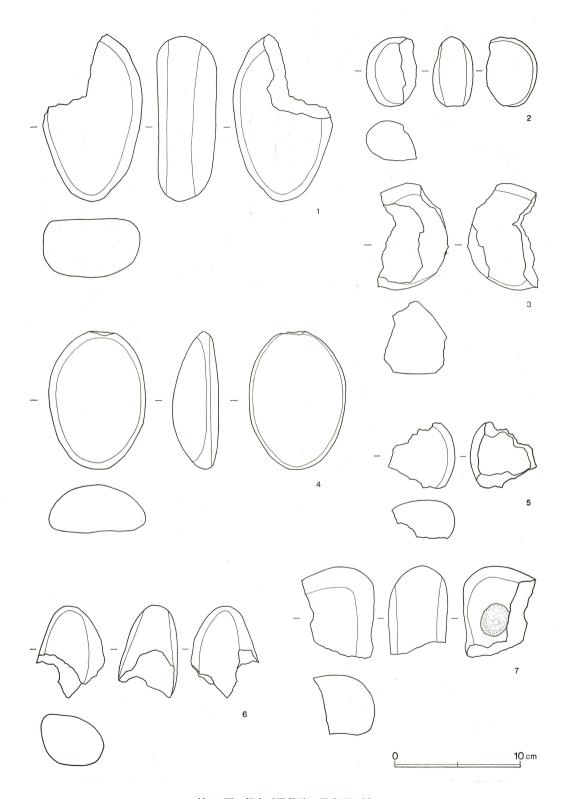
- 101—1. 石鏃 I-1区出土。全体としては二等辺三角形を呈するものと思われるが、先端部及び 両脚部は欠損している。赤褐色を呈するチャート製である。石鏃のみ%の縮尺である。
- 2. 礫器 【一1区出土。舟直下出土。裏面が比較的平坦で表面が盛り上がる長楕円形の礫を素材として、その一端に先端方向から打撃を加えて刃部を作出している。自然面には滑らかなところが認められる。粘板岩製である。
- 3. 礫器 $I-4 \boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一4 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \land A \circlearrowleft U = 1$ 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\boxtimes 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \circlearrowleft U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 $\bigcirc 2 \lor A \longleftrightarrow U = 1$ 、 本語 「一5 0
- 4. 磨石敲石 【一2区出土。全体としては扁平なスタンプ状を呈する。周辺部には敲打痕を有する。表裏両面及び下端の平坦部には顕著な磨減痕が認められるところがある。火熱を受けたために赤褐色に変色している。また、左側縁部から裏面にかけてカーボンの付着が認められる。砂岩製である。
- 5. 磨石 【一4東区出土。ほとんどの部分が現存していないので全体の形状は不明である。両面に若干の磨減痕が認められる。全体に火熱を受けた赤褐色を呈する。安山岩製である。
- 6. 磨石敲石 I-2区出土。全体は長方形によく整っている。両側縁及び上下両端には敲打痕を有する。両面とも滑らかに磨られており、横方向に走る顕著な線状痕が認められる。しかし、中ほどには敲打によると思われる若干の凹みも認められる。表面左上部には凹み石にみられるものと同様の凹みを有する。安山岩製である。
- 7. 軽石 【 ─ 4 区出土。明瞭な加工の痕跡は認められないが、この地域では自然堆積の場合には こうした大きなものが入っていることはほとんど考えられないので、何らかの目的でどこからかも たされたという可能性は高いと思われる。そのためあえてここに図示した。

笛 2 主	伊李氏屋數跡繩文時代石器計測表	
配る表	伊金瓦库製 跳獅 女 時代 有茶計測表	

番号	器種	出土位	: 置 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	石 質	備考	学
101—1	石鏃	I —1区	(2. 2)	(2.5)	(0.7)	チャート		
2	礫器	1区舟直下	10.3	4.3	3. 7	粘板岩		
3		I — 4 区	20. 4	9. 5	2. 8	緑泥片岩		
4	板岩	I — 2 区	(10.0)	6. 6	3 3	細粒砂岩	焼けている	
5	磨石	I — 4 区東	(4.0)	(6.5)	(2.8)	閃緑岩	"	
6	磨石・敲石・凹る	日 1-3区	13. 5	8. 1	4. 5	安山岩	"	
7	軽石	Ⅱ — 4 区	8. 2	4. 6	3. 0	"		
102—1	磨石•敲石	台地部124	5 13. 3	8. 1	4. 7	山安岩	焼けている	
2	敲石	台地部461	5. 7	(4.1)	3. 2	//	"	
3	磨石	台地部108	8. 5	(5.7)	(5.8)	//	"	
4	"	台地部232	11. 1	7.8	3.8	多孔質	"	
5	"	台地部230	(5.3)	(4.4)	(3.1)	安山岩	"	
6	// 台地部20		(7.5)	(5.5)	(4.2)	//		
7	磨石•凹石	台地部244	(7.3)	(5.8)	(4.8)	"	"	



第101図 伊奈氏屋敷跡石器実測図(1)



第102図 伊奈氏屋敷跡石器実測図(2)

第102図は台地部から出土したものである。

- 102—1. 磨石凹石 台地部出土。四分の一ほど欠損している。表面は凹面状に浅く窪み、裏面には 比較的小さく深い凹を有する。全体に火熱を受けてやや変色している。安山岩製である。
- 2. 敲石 台地部出土。欠損部分が多く、全体の形状は明らかではないが、残存部分からするとあまり大きいものではないことが推定される。石質のためにあまり明瞭ではないが、敲打の痕跡は認めることができる。全体に火熱を受けている。安山岩製である。
- 3. 磨石 台地部出土。多くの部分が欠損しているが、裏面が平坦で表面は分厚く盛り上がる円礫を使用していることは推定される。全体に火熱を受けており、赤褐色を呈する。安山岩製である。
- 4. 磨石 台地部出土。平面形は楕円形を呈するが、断面形はなだらかな山形となっている。機能面は裏面の平坦部であると思われるが、石質のためか線状痕は認められない。安山岩製である。
- 5. 磨石 台地部出土。ほとんどの部分を欠失している。火熱を受け、全体が赤褐色を呈する。安山岩製である。
- 6. 磨石 台地部出土。ほぼ下半部は欠損し、上半部のみ現存している。裏面の平坦部には縦方向 に走る線状痕が認められる。全体に火熱を受けている。安山岩製である。
- 7. 磨石 台地部出土。ほとんどの部分が欠失している。表裏両面とも縦方向に走る線状痕が認められる。裏面はやや窪む。全体に火熱を受けている。安山岩製である。

木製品

低湿地遺跡の特徴として、木製品が検出される機会が非常に多いという点があげられよう。当遺跡においても例外にもれず、丸木舟、弓、杭等が鮮明な色のまま発掘された。順をおって説明を行っていく。

丸木舟(第103図1·2)

I-1、2区でそれぞれ出土したものであり、木をくり抜いて作られたものである。共に舟の幅が上下で $10\sim15cm$ の差が認められる。1はたち上がりが低く、深さは8cmを測る。図面上部の舟底が厚さ $1\sim1,5cm$ にわたり炭化しており、薄くなっている。2はたち上がりが高く、深さは20cmを測る。図面下部舟底は炭化している。また、舟底両端が削られており、少し上っている。

櫛(第104図1)

櫛の頭部が½残存している。歯の部分は欠損してしまっており、飾りの部分のみである。縦長の 瘤のまわりに三角形の透かし彫りが施されている。全面に漆が塗られている。

刳物(第104図2、3)

2は口縁部であり、外面には3本の沈線が巡る。3は底部付近のものである。いずれも内外面に 極暗赤褐色の漆が塗られている。

加工材 (第104図 4~7)

 $4\sim 6$ は一括出土である。いずれも婉曲しており、幅 4 m 、深さ 0.5 m 以下の樋状の溝が数本走る。小片であり、形状、溝も不統一であるため、人為的なものであるか、そうでないものか不明瞭である。 7 は厚さが 1.5 m の一定の厚さを呈しているため板材としたものである。木目が平行であるため、あるいは木目にそって割れた自然木かもしれない。

第4表 木製品計測表

番号	種 類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	径 (cm)	番号	種 類	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	径 (cm)
103-1	舟	I-1	370	60 • 45	5		105-2	弓	I — 5	(67)			2
2	舟	I — 2	485	55 • 45	5		3	弓	I — 3	(65)			1.7
104-1	櫛	Ⅱ — 4		(8)	1		106-1	櫂?	I — 3	(44. 5)		1.5	2
2	刳 物	I — 5			0.7	15	2	加工木	I — 5	(34. 2)			0.9
3	刳 物	I — 5			0.7		3	丸太材	I — 3	(23)			2
4	加工材	I — 2		(5)	2		107-1	丸太材	I — 4	(74)			6
5	加工材	I — 2		(3.5)	0.5		2	丸太材	Ⅱ — 4	78		,	6.7
6	加工材	I — 2		5. 5	2		108-1	丸太材	I — 4	55			6
7	加工材	I — 4	15	5. 5	1.5		2	丸太材	I — 3	(62)			3. 2
8	弓	I — 3	80			1.3	3	丸太材	I — 3	48			4.9
105-1	弓	I — 5	(151)			2. 2	4	丸太材	I — 4	39. 4			3. 6

弓 (第104図 8、第105図 1~3)

第104図8は木の枝の部分を利用したものであり、素材の取り方は長い枝の必要な長さとする両端に深さ2~3mmの切れ目を輪状に入れ、そこから折り取ったものと思われる。下部の基の太い部分は枝を裂き細くしている。次に上下端部に刻みを入れ弓弭を作出している。第105図1は、2本が同一個体であり、左下端と右上端が約20cm間をおいて接合するものである。また、下半は欠損している。先端部は50cm手前から序々に削って半円形に作り、幅6mm、深さ5mmの溝を縦に掘っている。弓弭は刻みを入れてコブ状に削り出している。なお、弓の側縁には径3mm前後の穿孔した穴及び途中まで開けられた穴が認められる。人為的なもの、あるいは虫食いであるかもしれない。第105図2は赤漆塗の飾り弓である。樋が1本入っている。その上に逆時計廻りで幅5mmの皮が2対4ヶ所巻かれている。弓弭は細く削り込まれたものである。第105図3は、細長くやや彎曲した枝ぶりを呈しており、また上端部が瘤状になっているため弓弭の部分として使用されたものとして弓と分類したものである。上端より45cm程の所まで炭化している。

櫂 (第106図1)

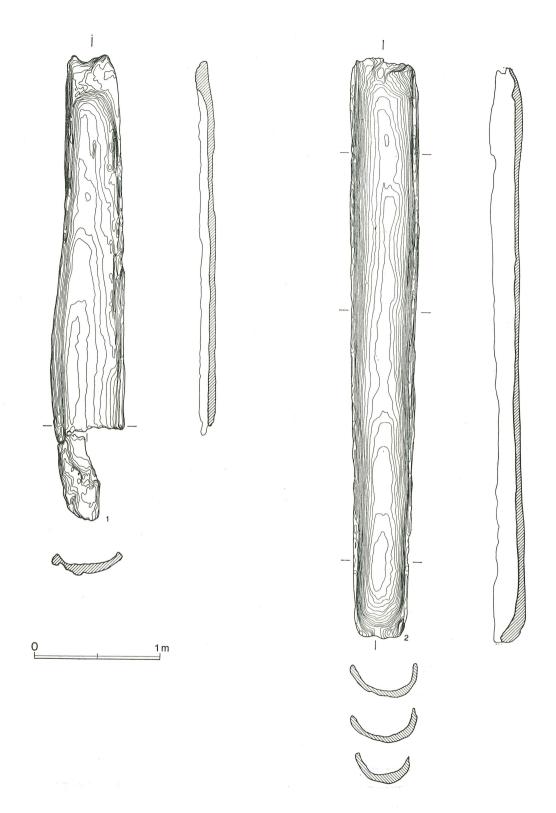
先端部が縦に½残存しているものである。柄の部分は丸く作出してあり、水かきの部分は、平らに削り入んである。幅は6cm程と推察される。全体的によく磨かれている。

加工木 (第106図 2)

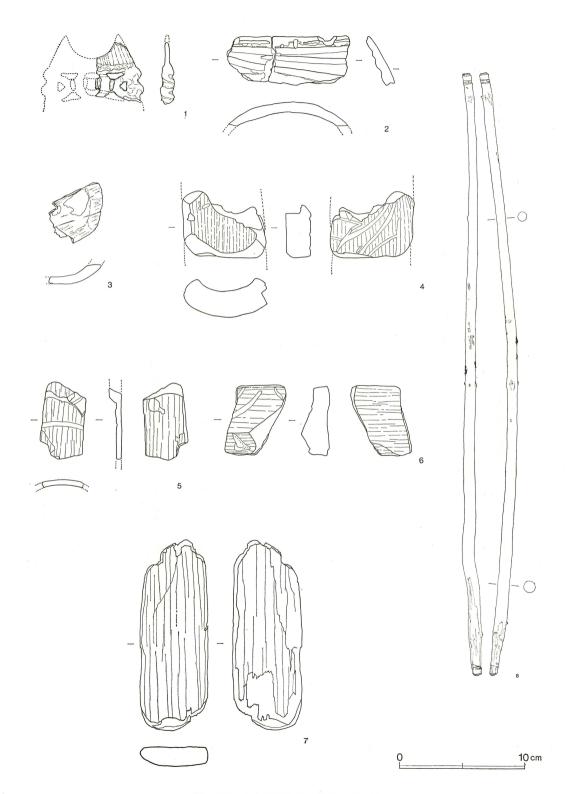
厚さ9mmのよく磨かれた板材の側縁に2ケ所のえぐりが施されているものである。木目に沿って縦に割れており、用途は不明である。えぐりは、丸く加工された先端部より、7cmと19.5cmの所に作られている。

丸太材(第106図3、第107図、第108図)

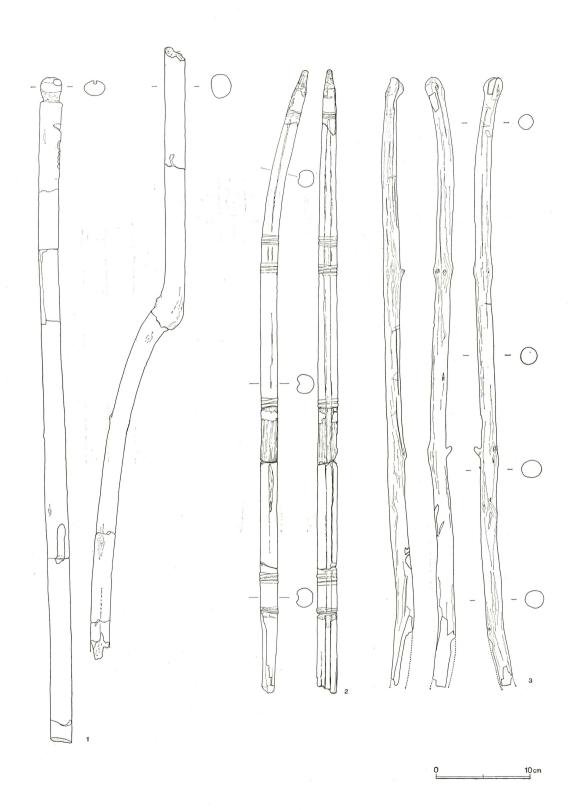
丸太を切断し、使用したと思われるものを一括した。第 106 図 3 は両端が欠損しているが、皮が剝がれており、直線的であるため丸木材としたものである。径が 2 cmを呈しており弓の可能性もある。第 107 図 $1 \cdot 2$ は大形であり、2 は78 cmを測る。第 108 図 1 は中形であり、 $3 \cdot 4$ は 小形 である。いずれも直線的な木材が用いられており、鋭利な刃物で上端から中心に向けて何打か切り込みが入れられ、中心部は折り取られている。切り込み部分はややささくれ立っている。



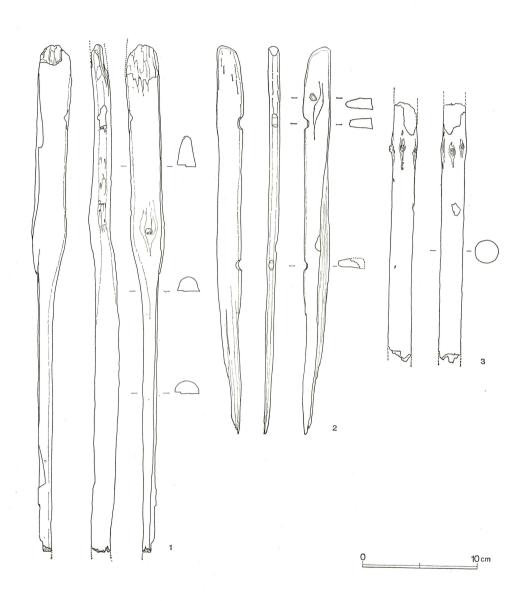
第103図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(1)



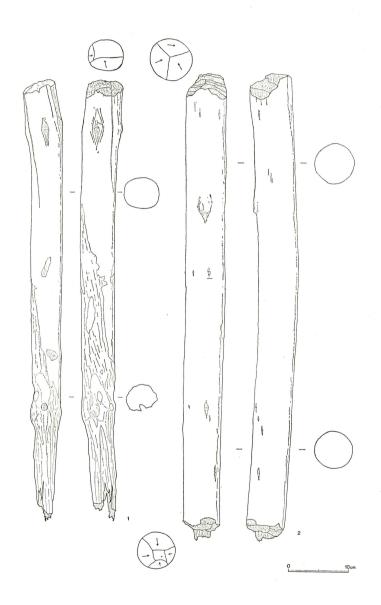
第104図 伊奈氏屋敷跡木製品実測区(2)



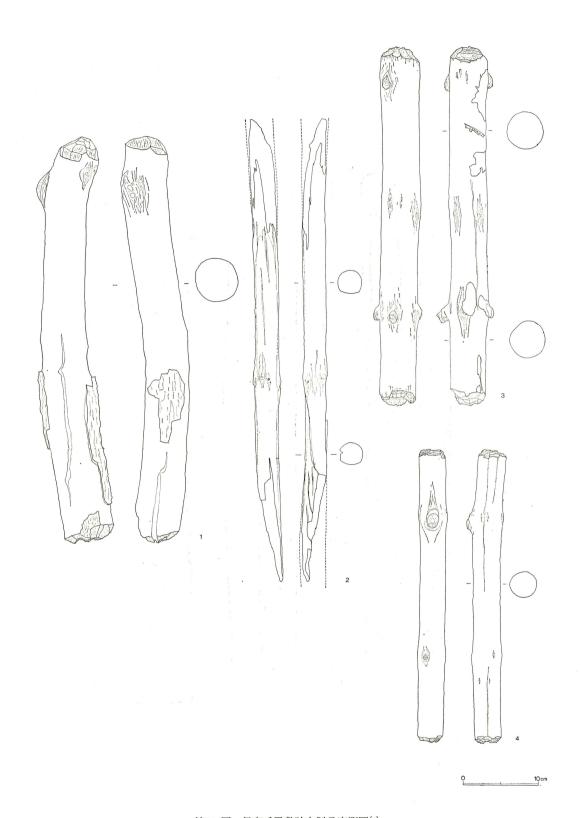
第105図 伊奈氏屋敷跡木製実測図(3)



第106図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(4)



第107図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(5)



第108図 伊奈氏屋敷跡木製品実測図(6)

(3) 中・近世

裏門の堀 (第64・109図)

位置は伊奈屋敷跡北東端の台地が最も狭まった鞍部にあり、北東の台地と画するに最適な地である。 堀は台地上に入れた裏門地区の調査区と $\mathbb{I}-2$ 区に確認された。

堀は台地を区切るように、南西から北東に向って走り、確認された長さ37.9mを測る。台地上ではほぼ直線であるが、北東斜面を下るにつれてやや東へ屈曲する。

堀の幅は2.8m前後であるが、南西端では3.3mを測る。深さは台地中央付近で1.1m を測るが、他は0.7m と浅いつくりである。

堀は箱堀であるが壁に傾斜を持つ、いわゆる箱薬研堀である。縦断面は台地中央部が高く、台地に沿って緩やかに下っていく。台地中央部の堀底の標高は7.3mを測るが南西端では5.7m、北東端では6.0m である。このように確認部分で $1.3\sim1.6m$ の比高差があり、現状の堀り込み面が当時の状況だとすれば、台地中央部の堀底に水が届くと北東・南西両端の堀は冠水することになる。台地最高位の堀の水が底から0.6mの深さになれば、台地中央9.8mの範囲を除いてすべて冠水することになる。最も高いこの付近に橋が掛けられたと考えられるが、橋桁の痕跡はなく掛橋のようなものが渡された可能性がある。

堀の掘削された土層は、台地鞍部中央付近ではローム層に掘り込まれていた。南西に近づくにつれて、二次堆積である黄灰色粘質シルト層に掘り込まれるが、南西端から7m中央寄りまでは下底面にロームが見られる。しかし南西端では堀上半部が黄灰色粘質シルト層に、下半部が基盤の灰白色砂層に掘り込まれていた。南西端から25.8m北東へ行ったD-D'のセクションでは下底面が明黄色ローム層に掘り込まれていたが、壁の多くは2次堆積の暗茶褐色シルト層に構築されていた。1-2区内では厚い粘土層が堆積しており、堀の確認は不明確であったが、堀の確認できた東北端では明茶褐色土および粘質明灰色シルト層に掘り込まれていた。

堀の堆積土は中央部と端部では全く違い、中央部ではロームを主体とした土であり、 粘性 も なく、堀の中央部が常に冠水していたとは考えられない。中央部に比べD—D′のセクションではやや 粘性を帯びたシルト層が主体となり、北東・南西両端部では灰白から暗灰色の粘質シルト 層に なり、冠水していたと考えられる。

堀の南西端セクションの表土に近い標高7.9mには極く薄い火山灰が一層確認され、標高 $7.6\sim 7.7m$ でも薄い火山灰が 3 層確認された。火山灰は堀が埋没したのち0.5m以上の間を置いて見られ、最上層の火山灰は耕作土直下のまこも層中にまばらに見られ、 $2\cdot 3$ 層もまこも層の中に点々とあった。4 層はシルト層中にあり、連続して確認できた。1 層の火山灰はやや黒っぽい河原砂のようであり、2 層もやや黒っぽく $0.2\sim 0.3mm$ の砂質である。3 層は黄色を呈しやや砂質であり、4 層も黄色で細粒砂質である。

遺物が出土していないため掘削時期は不明であるが、火山灰層のいずれかが天明3年に降下したものとすれば、堀の掘削時期はそれ以前の伊奈陣屋創建時あるいはそれ以前まで遡ると考えられる。

堀障子・土塁 (第110・111図)

発掘区は伊奈屋敷跡西方の原市沼に突出する位置にある。検出された堀は伊奈屋敷跡の縁辺の土塁に沿って湾曲している。堀はいわゆる堀障子で、方形の区画が土塁側と沼側に2列確認できた。確認できた各区画は合計14区で全長およそ23mである。

以下各区画を北側から土塁寄りをA区、沼寄りをA′区とし、 南へG・G′区まで設定して説明する。G′区については明確に残存していたが、水による崩壊が進んだため、詳細不明な点が多い。

各区は3本のトレンチと1グリッドにより確認されたため詳細な平面形態の比較はできないが、 $E \cdot E'$ 区が他区に比べ南北に長い形状を持つ。また $F \cdot G$ 区は南側の幅が広い形状である。これらはいずれも畝の残し方に左右されたものである。各区の平面形態と畝とを考え合わせると、土塁側から沼側への畝は通っているようであるが、土塁側と沼側を画する南北の畝は屈折している。その位置はBとC、EとFの間である。おそらく $A \cdot B$ 、 $C \cdot D \cdot E$ 、 $F \cdot G$ の3区画に分坦して掘られたため、3区画の南北方向の畝は屈折したのではなかろうか。3区画の違いは以下に述べる深さ、断面形にも区別が見られる。

堀の全体の幅はG-G'が6.8m、F-F'が6.6mであり、北へ行くほど狭くなっているようである。これは沼側の各区の幅の違いによっており、F'は3.35mであるが、E'では2.3m、B'では1.8mを測ることに起因しているようである。土塁側の各区の幅はFが南北畝に規制されて や や 狭 く 2.5m、Cが傾斜面を含め3.6mを測る。長さはEとE'が最も長く4.55mと5.0mを測るが、他は 3m前後である。

深さは最深がD'とE'の $0.85 \cdot 0.86 m$ であるが、 FとF'は $0.28 \cdot 0.3 m$ と浅く、 施設として機能したのか疑問である。他区は0.6 m 前後が多い。

堀底の標高は土塁側に比べて沼側の方が低い傾向にあり、B'で6.55m、D'が6.71m、E'が6.72mと低く、F'が7.12m、Fが7.17mと高い。隣接するE'とF'では0.4mの比高差がある。

堀底の断面形は平底が主体であるが、 $\mathbf{D} \cdot \mathbf{D}' \cdot \mathbf{E} \cdot \mathbf{E}'$ 区は \mathbf{U} 字形となり、 この区画のみ前記したように深いのが特徴である。

畝の断面形は台形で、傾斜角は 44° から 73° を測るが、主体は 60° から 70° である。 $D \cdot D' \cdot E \cdot E'$ は 44° から 58° であるが、 $A \cdot A' \cdot B \cdot B'$ が 62° から 73° と急傾斜である。

堀の土層は最下層に壁の崩壊土と思われる砂質土が約0.1m 堆積した後、短期間で埋ったと思われる粘質土が充満していた。粘質土の上層には黄灰褐色で、下層はグライ化のため青灰色を呈し、部分的に砂質土を混入する。土層を見るに一部に砂層がラミナになる部分があるが、自然の湧水、雨水程度であり、水堀としては利用されなかったと考えられる。

堀付近の基本土層はロームの下に黄白色粘土層があり、標高7.8m 付近で灰青色砂層に変わる。 灰青色砂層中の標高7.3m付近には0.1mの厚さで白色粘土を含む明黄褐色砂層を挟んでいる。堀の 掘削は白色粘土を含む明黄褐色砂層の下まで到達しており、畝の最上部に一部黄白色粘土層を乗せ るだけで、壁も底も灰青色砂層によって構成されている(第111図H—H′)。

E区堀底の3.5m上の標高10.7m前後には、土塁の底面がある。土塁は確認されただけで高さ0.8m、幅2.3mを測るが、現存部分で推定高2m、幅6mと考えられる。土塁の堆積土は、青灰色砂

質土層と黄白粘土色の互層で、版築状に築き固められていた。後者が土塁の下層にあることを考えると、堀の掘削土を順次上に積み上げて土塁を築いたことがわかる。また伊奈屋敷の台地を巡る土塁と畝堀は同時期と予測できる堀の堆積土はこの土塁の崩落土が主体であったと考えられ、短期間の埋没であると推測できることから、自然埋没以外に人為的な埋め立ても予測できる。いずれにしても砂層に掘り込まれた堀が崩壊せずに残ったのは、短期間の埋没によるものであろう。

堀からの出土遺物がないため、掘削時期は不明である。しかし堀障子の形状から戦国期に遡る可能性が高い。

埋め立て地 (第65・66・112図)

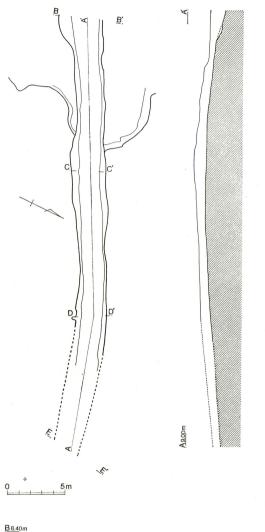
位置は伊奈屋敷跡北西の裏門西側にあり、 $\mathbb{I}-3$ 区とその北側に入れたトレンチおよび、 $\mathbb{I}-4$ 区南端部に僅かに確認された。

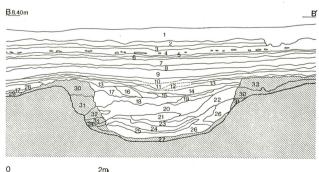
II - 3区においては発掘区の北側%に厚い粘土層が確認できた。台地寄りでは 0.7m 前後の厚さがあり、途中で下のまこも層との関係であろうか約 0.3m の厚さになる。さらに沼寄りでは埋め立ては深くまで達し、厚さも 1.4m を測る。埋め立ては順次沼側へ広げて行き、 3 回に分けて行なわれたようである。まず埋め立ての最も薄い部分の沼側に茶褐色土を入れ、次いで台地から最初に埋め立てた部分の上を覆い、順次沼側へ白色からクリーム色の粘土を入れている。最後は沼側に柵をつくり、その間へ部分的に青白色粘土を含む茶褐色土を入れているが、 $1 \cdot 2$ 回の埋め立て土層が沼への傾斜を見せるのに対して、最後の埋め立ては水平の堆積を見せる。

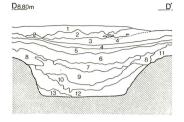
柵はまず太さ約10cmの杭を50cm間隔に打ち込み、柵の上方に横へ太さ5cmの竹を通し、そこへ持たせ掛けるように間隙なく竹を並べ、その下部へ $6\sim8$ 本を竹で縛った束を3 束程敷いている。これによって埋め立ての土が流れ出さず、沈まないような工夫がなされている。

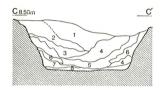
柵は東西方向に走ること、I-4区南端部に埋め立て粘土が見られることから、その幅は約14mを測る。地表観察ではこの埋め立ての位置に水田位よりやや高い平坦部があり、台地縁辺に沿って南へ連なっている。おそらくこの平坦面が埋め立てによって形成されたものである。

出土遺物は【一4区と【一3区間のトレンチから検出された近世後期の磁器だけである。埋め立てられた粘土の下にはまこも層があり、その上位には薄い褐色火山層が確認された。この火山灰層は裏門の堀南西端に見られた最上層の火山灰とほぼ同一の組成である(堀口万吉氏の現地調査時採集資料分析結果による)。天明3年の火山灰と推定できるならば埋め立て時期もそれ以降であろう。また田中家蔵の嘉永3年の絵地図には、すでにこの位置に神社があることから、それ以前と考える。









c-c'

- 1 淡緑褐色土 炭化物徴量黄色粒少量
- 1 次線橋巴土 灰化物領量寅色科少軍 含有、粘性ややあり、しまりややあり 2 明緑褐色土 炭化物徴量黄色粒多量 含有、粘性弱く、しまりなし。 3 灰褐色土 炭化粒徴量黄色粒中量含 有、粘性弱、しまりややあり。 4 暗灰色粘質土 炭化粒徴量含む、し

- まりあり。 褐色土 壁に行く程黄褐色となり、 ロームを多く含む。粘性なく、しまり ややあり。
- 黄褐色土 ローム流入土、粘性、し まり共になし。
- 明褐色土 ロームブロック 多量含有、炭化物徴量含有、ぱさぱさした土 粘性、しまり共になし。
- 8 暗褐色土 ロームブロック、黒褐色粒混入土、しまり粘性共になし、壁の 崩壊土。

第109図 伊奈氏屋敷跡 I 一4東区溝

第 109 図の説明

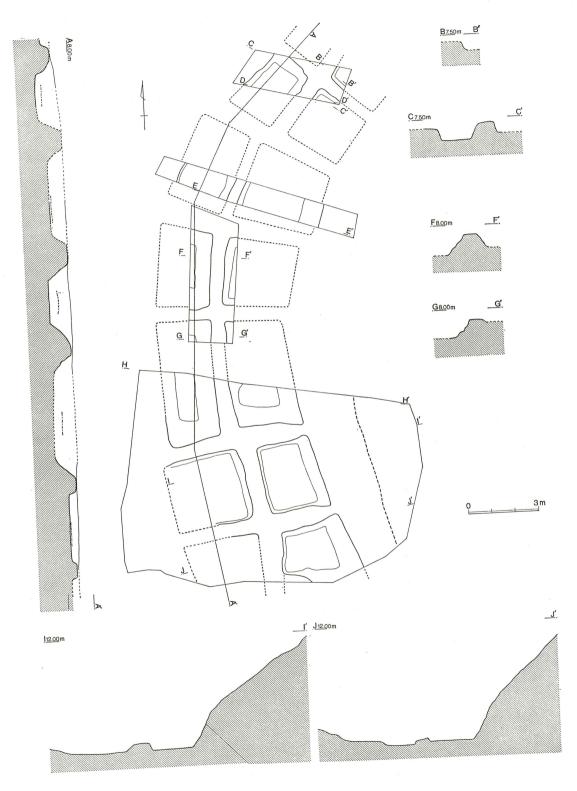
D-D'

- 1 明茶褐色シルト 粘性なし、しまりよし、∅0.2 ~0.5mm程の白色パミスを若干含有。
- 2 黒色シルト 粘性ややあり、しまりよし、①層 と混じるところが部分的にある。②層本来の部分 にはパミスを含まず、植物繊維を微量に含有。
- 3 黒褐色シルト 粘性微弱、しまり悪い、毛根状 の植物繊維を多量に含むためにやや褐色味を帯び る。
- 4 黒色シルト 粘性弱、しまり悪し、毛根状植物 繊維を多量に含有(③層より少ない)繊維やや大 型化。
- 5 明灰黄褐色シルト 粘性中、しまり悪い、植物 繊維多、④層よりさらに大型のもの増加。
- 6 明灰黄褐色シルト 粘性中、しまりやや良い、植物繊維多、大型のものが本セクション中最も多い、セクション両端に近づく程、明黄色に強くなる、⑤層より明灰色。
- 7 暗灰褐色シルト 粘性中、しまりやや良い、帯 水性増加、植物繊維減少、Ø1~3mmの炭化粒を 少量含有。
- 8 灰黄色シルト 粘性中、植物繊維⑦層と同じ、 しまり悪い。
- 9 明灰黄色 粘性中、しまり悪い、植物繊維やや減、⑦層と同じ炭化粒を含有。
- 10 灰白色シルト 粘性やや強、毛根状植物繊維増 大、帯水性良い、炭化粒減少。
- 11 明黄褐色シルト 粘性中、植物繊維多、しまり 良し。
- 12 暗茶褐色砂質シルト 粘性なし、帯水性良い、 植物繊維きわめて多い、植物繊維と砂のため層全 体がボロボロしたかんじ。
- 13 暗褐色砂質シルト ②層を基調にローム粒が多量にまじる、しまり良好。
- 14 暗茶褐色シルト ⑫層よりさらに暗い。砂粒含まず粘性なし、しまり悪い、植物繊維多。
- 15 明黄色ローム 粘性弱、しまりきわめて良し。

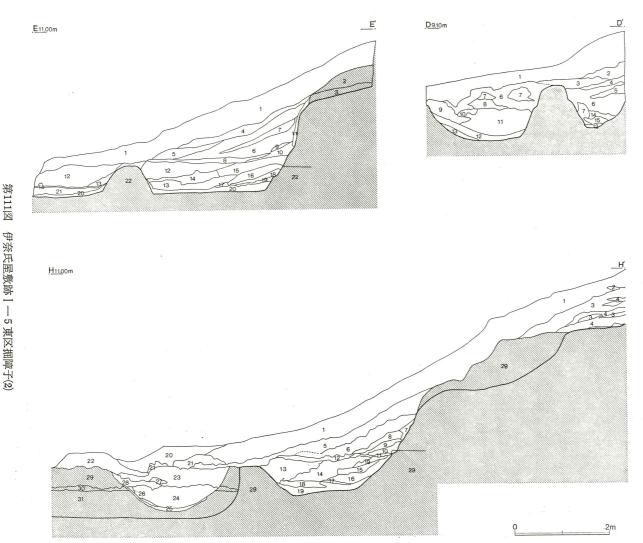
B-B'

- 1 耕作土
- 2 黒褐色シルト 粘性なし、しまり悪い毛状のま こもを多量に含む、帯水性良まこもは厚さ数ミリ で層状に堆積する。
- 3 黒色シルト 毛状のまこもを多量に含む(②よりは少し) 粘性なし、しまり悪い、帯水性良。
- 4 黒褐色シルト 粘性なし、帯水性良、しまり悪い、②同等に多量のまこもを含む、②よりやや黄色、大底部でやや黒味が強い、同層中央に黄色のテフラらしきものを点々と含む。黄色ブロックはやや砂質を帯びる。
- 5 暗黄褐色シルト粘 粘性弱、帯水性良、しまり 悪い、左半部では上方から黄一黒一黄となり、下 底部の黄色が細粒砂質のテフラである。本テフラ は、セクション右半まで連面と続く、まこも極め て多。
- 6 黒色シルト 粘性弱、帯水性良、しまり悪い、 相層は③に似るが下半部でやや褐色味を帯びる。
- 7 暗黒褐色シルト 粘性弱、帯水性良、しまり悪い、まこもは③と同良、やや大型のもの増加。
- 8 暗褐色シルト 粘性、帯水性、しまり⑦と同

- じ。まこも⑦に同じ。
- 9 黒褐色シルト 粘性、帯水性、しまり®と同じ、まこもやや増加するが、下底部で再び減少、 色調は上層で黒く、下層ほど明褐色を帯びる。
- 10 灰褐色粘質シルト 粘性やや強、しまりやや良、 帯水性良、まこもかなり減少。
- 11 黒褐色シルト 粘性⑩よりやや減少、しまり悪い帯水性良、まこも増加しかなり含む。
- 12 灰白色粘土 粘性強、しまり悪い、帯水性良、まこも少量含む。
- 13 灰黄褐色粘質シルト 粘性やや強、しまり良、 帯水性良、まこも少量含む。Ø1~5 mmの小礫を まれに含む、炭水化物微量に含む。
- 14 黒褐色シルト 粘性弱、帯水性良、しまり悪い、まこも少量含む、やや灰色味(粘土分)を帯びる。
- 15 黒褐色シルト 粘性弱、帯水性大、しまり悪い、まこも大量に含む、上層部で黒く、下層部で 褐色味を帯びる。
- 16 黄灰白砂質シルト 粘性ややあり、しまりやや わるい、まこもやや多い、 \emptyset $1 \sim 5$ mmの小礫をか なり含む。
- 17 暗黄灰白砂質シルト しまり良く、他の層相は ⑥と同じ。
- 18 黒褐色シルト 粘性なし、しまり悪い、帯水性良、炭化物粒(Ø1~2mm)をかなり含む。まこも多。
- 19 暗灰色粘質シルト 粘性やや強、帯水性良、しまりやや良、炭化物微粒子少量含む、まこも少量
- 20 黄灰白粘質シルト 粘性かなりあり、しまり良く、まこも少量、粗粒シルトを少量含。
- 21 暗黄灰白粘質シルト 粘性かなりあり、帯水性 あり、しまり良し、∅1 mm以上の炭化粒を多量に 含む、まこも少量。
- 22 黄灰白粘質シルト 粘性強、しまり良し、粗粒シルト分を多量に含む。
- 23 暗灰白色粘質シルト 白色粒土を挾む他は②と 同じ。
- 24 暗黄褐色粘質シルト 粘性強、しまり良し、ま こも微量、細粒及び小礫を若干含む。
- 25 暗灰黄褐色粘質シルト 粘性強、しまり良し、 炭化物粒、多量に含む、まこも微量、細粒砂を含 む。
- 26 黄灰色砂質シルト 粘性やや強、しまり良好、 炭化物粒かなり含む、まこも徴量に含む。
- 27 青灰白砂層 基盤
- 28 黒褐色シルト 粘性弱、しまり悪い、帯水性良、まこもやや多。
- 29 暗褐色シルト 粘性なし、帯水性良、しまり悪い、まこも多、細粒砂をかなり含む。
- 30 黄灰粘質シルト しまり良し、粘性強、砂粒かなり含む、小礫少量含む、⑬⑯⑰等は本層の再堆積と思われる。
- 31 黄灰粘質シルト 粘質やや強、しまり良し、® より灰白味が強い、他は®類似。
- 32 暗黄灰白シルト 粘性なし、しまり悪い、帯水性良く、木根による腐触の進行した結果か、まこもやや多。
- 33 暗褐色シルト 粘性ややあり、しまりやや良、 まこもかなり含む、細粒砂若干含む、ローム粒ら しきものを鹿子まだらに含む。



第110図 伊奈氏屋敷跡 [— 5 東区畝堀(1)



E-E'

- 1 表土 褐色ローム質
- 2 褐色土 ロームブロック状で 下層近くは粘性あり、表土近く は、ぼろぼろ。
- 3 褐色土 ②層に比べて多少黒 く、粘性あり、炭化物も若干含 まれている。
- 4 明褐色土 ⑥層とやや同じで 白色粘土のブロック状が含まれ ている。
- 5 明褐色土 ⑤層も同じだが砂 質シルトを若干含んでいる。し まりがよく粘性強い。
- 6 明褐色土 ④層と比べて明る く北壁②層と等しい。
- 7 暗褐色土 白色粘土粒子を多 量に含み粘性強い。
- 8 暗褐色土 黄褐色土 で粘性 強、帯水性少、部分的に明黄灰 色のシルトを含む粘土質層又少 量ながら腐植を含む。
- 9 明黒褐色土 堆積過程において腐植が混入されたものと考えられる。
- 10 暗褐色土 粘性やや弱く、帯 水性少、黄褐色の粘土粒及び腐 植土を少量含む(北側 section ④層に対応)
- 11 暗褐色土 ⑩に比べやや暗い、しまりが弱く少量の砂を含む、腐植が流入したものと考えられる。
- 12 明黄灰色土 部分的に明褐色 の粘土を含む、少量ながら腐植 を含む(北側 section ⑥層に対 応)少量ながら淡黄灰色シルト ブロックを含む。
- 13 淡黄灰色土 ⑫⑮と均質であるが明褐色ロームの混入率がかなり低く、灰色土の割合が高い、帯水性良く、粘性は大きい、多

量に暗い灰色シルトを含み徴量ながら腐植をも含む。

- 14 暗黄褐色土 しまりが非常によく帯水性少、少量の明黄褐色シルト粒子を含む、更に堆積時に混入したと思われる黒褐色の腐植を含む、この黒褐色シルトは北側 section ⑦と均質。
- 15 暗黄灰色土 帯水性少、粘性強、⑫層に比べ明 褐色土の混入率が高い、⑫層と均質。
- 16 暗黄褐色土 腐植が多量に混入している(北側 section ⑭層に対応)
- 17 暗褐色土 帯水性あり、粘性弱し、褐色粘土粒子を少量含む、⑩層に比べやや暗い色を呈す。
- 18 青黄灰色砂質シルト やや黄褐色の粘土を含む (北側 section ⑫層と対応)
- 19 暗灰質粘土層 腐植少量あり、やや水っぽい。
- 20 暗青灰色砂質シルト 北側 section ⑭層に等しい。
- 21 暗褐色土 少量ながら黄褐色粘土粒子を含み又部分的に多量の明灰色シルトを混入する(北側section ⑨層に対応)

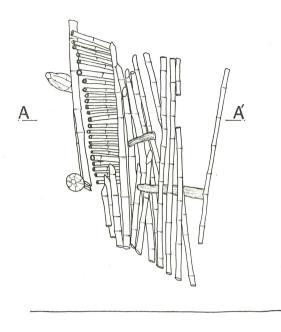
H-H'

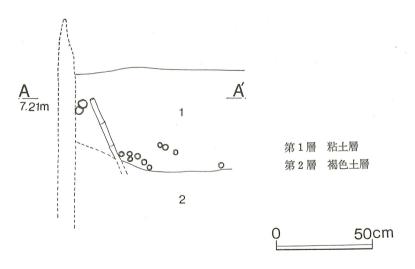
- 1 黄褐色粘質土 一部砂と粘土が混入する土塁の 崩壊土、しまりなし。
- 2 茶褐色土 ①よりロームと白色粘土粒が混入する。やや粘質のある土、しまりなし。
- 3 青灰色砂質土層 大変よくしまっており、つき かためられている、黄白色粘土含む。
- 4 黄白色粘土 つき固められ固い。
- 5 明黄色土 土塁から流れて来た砂と粘土粒が混じるよくしまっている。
- 6 明黄色土 ⑤より白い。より黄白色粘土を多く 含む。粘性さらに増す。
- 7 暗茶褐色ローム しまりなく、さらさら、一部 黄色の徴粒子を含む。
- 8 茶褐色土 粘土徴粒子を少なく含む、しまりよ し。
- 9 褐色土 ロームを主体とする流れ込み。純粋、 しまりやや悪い。
- 10 茶褐色土 ⑧に似るが、さらに暗色で粘性、しまり増す。
- 11 汚黄色粘質士 ⑫に似るが、黒色、茶褐色粒が 多く混じり、粘性低下。
- 12 黄色粒土 一部白色粘土を混じる、しまり強。
- 13 黄白色粘土 一度に埋積した可能性強い、しまりよし、粘性強、一部に砂の小ブロックを含む。
- 14 茶褐色土・黒色土・黄白色粘土の混合土 粘土 部分をのぞきしまり悪い。
- 15 ⑭と同じだが、個々の粒子が小さくなり、トーンが灰色基調になる、上層の一部に砂を含む。
- 16 ⑮がさらに進行。
- 17 灰褐色砂質土層 上層の粘質土により、やや粘 性をおびる。
- 18 ⑭と似るが、環元状態にあるため、基調青灰色をおびる。
- 19 青灰色粘土層
- 20 黒褐色土
- 21 黒色土
- 22 暗黄褐色土
- 23 黄灰褐色粘質土 粘土粒と砂質土が混合
- 24 青色粘質土 図り同じだが、還元状態
- 25 青灰色粘土 一部微砂粒を含む。
- 26 暗灰青色砂質シルト 一部に砂粒を含む、粘性、しまりともになし。

- 27 黄灰色粘質土 しまりよし。
- 28 黒灰褐色粘質土 しまりよし、上層でより灰色
- 29 灰青色砂層
- 30 明黄褐色砂層 やや粘質 | 堀の掘られた基
- 31 暗灰色砂層 下層ほど粗砂
- 32 淡黄灰色粘質土
- 33 青灰色砂層 細成は②と同じだが色がちがう、谷に向かうと粘質をます。
- 34 灰色粘土 しまり大変よい。
- 35 暗灰青色粘質土 黒斑あり。

D-D'

- 1 表土 褐色土、ローム質。
- 2 明褐色土 粘性弱、白色の粒土がブロック状に 混じり全体にボロボロしている。
- 3 黄褐色土 粘性強、やや帯水性あり、鉄分の沈 着が少し認められ、このため白色の粘土が部分的 に強く褐色を帯びる、暗褐色の汚れた土を少量含 すた。
- 4 暗褐色土 粘性ややあり、帯水性ややあり、① より若干暗い、②③⑥に比べ均質。
- 5 褐色土 粘性やや強、しまり、まちまち、⑥と ④が混ざったような層で白色粘土をブロック状に 含む、部分的に非常に硬い。
- 6 明黄灰色 粘性強、帯水性あり、部分的に褐色を帯びる白色粘土の堆積、本層はローム台地の基盤を形成する粘土層の再堆積したものと考えられる。
- 7 黒褐色シルト 粘性弱、帯水性あり、堀を堆積する過程で腐植が混入したものと思われる。
- 8 褐色土 ⑤とほとんど同じだが、若干粘土が多く明るい。
- 9 暗褐色土 粘性強、しまり悪し、白色の粘土を 若干含む。
- 10 明オリーブ色シルト 粘性強、しまりよし、層内は均質。
- 11 青灰色粘質シルト 粘性強、帯水性良い こしまり悪い、上層は⑥に近い下層は粘土粒がさらに細くなり砂を微量に含むようになる。⑥が還元状態でグライ化したものと思われる。
- 12 青灰色砂質シルト ⑪と基盤の砂層がラミナに なって互層に堆積する。
- 13 黄褐色砂質シルト ⑫と同じだがや や砂分が 強、⑫と対、鉄あるいはマンガンが沈着したと思 われる褐色層が発達し、全体に黄味が強くなる。
- 14 暗青灰色砂質シルト ⑪に対応するが腐植が多量にまじり暗褐色を帯びる。
- 15 黄褐色シルト 粘性弱、帯水性ややあり、白色 粘性を少量含む、部分的に硬くしまっている、青 灰色砂をブロック状に少量含む。





第112図 伊奈氏屋敷跡 Ⅱ — 3 区埋め立ての柵

4. まとめ

(1) 石器について

<先土器時代>

該期の資料が出土したところは、大宮台地の北東部、小室支台の一支丘上で、東に向かって突出 した支丘の肩部から緩斜面にかけての部分である。

標高はおよそ $11m\sim12m$ ほどで、沖積地との比高差は約3mを測る。調査の対象面積は約 $280m^2$ と狭い。

調査区の西側すなわち本遺跡の乗る支丘の平坦部分は、路線からはずれるため調査の対象外であった。該期遺跡の一般的なあり方を考慮すると、今回の調査は遺跡の東端部分を発掘したにとどまり、その大半は未だ土中に眠っていると考えられる。したがって、遺跡全体についての分析などは行なえないままになっている。

また、台地下の低湿地調査区からも該期の資料が出土しているが、それらは繩文時代以降の遺物 と共に出土しており、本来の位置を失なっていると考えられる。そこで、ここでは台地上から検出 された資料を中心に記述をすすめ、低湿地出土のものに関しては、その都度必要に応じて触れるこ ととする。

また、出土層位はソフトロームの下面からハードローム上半にかけての部分であり、その中心は ハードローム上位にあると考えられる。黒色帯まで及んでいないのは明らかである。各ブロックの 垂直分布をみても、出土レベルは安定しており、層位的に石器群を分離することはできない。した がってここでは一応、出土した石器、礫ともに同一時期の所産という前提で記述する。

<遺物の平面分布>

今回の調査で台地上から出土した該期の資料は8点のナイフ形石器を含む総計162点の石器群、拳大の礫290点余である。それらは約20mの間隔を置いて二箇所に集中して分布する(第29図)。便宜的に北側の集中箇所をN群、南側のそれをS群と呼ぶ。以下各群毎に出土資料の平面的なあり方を略述し、まとめてみたい。

N群はおよそ 4×8 m の広がりをもち、台地の肩部から東面する緩斜面にかけて、南北に細長く展開している。同群のほぼ中央部にナイフ形石器を含む石器群が分布するが、これを N_1 ブロックと呼ぶ。同ブロックは約 4×3 m の範囲に弧状に広がるが、その分布は散漫である。

また、N群全体には拳大の礫が分布するが、その多くは N_1 ブロックを南北から挾むようなかたちで展開している。礫群としては命名しなかったが、散漫に分布する2つの礫群として認めてよいかもしれない。礫の大部分は熱を受けており、表面が赤く変色し、割れているものも多い。

一方、N群の垂直分布をみると、石器群、礫ともにほぼ同じレベルを保ち、斜面の傾斜に沿って 分布しており、両者を分離することはむずかしい。したがって、N群においては一箇所のブロック と二箇所の礫群が南北に隣接しながら、併存していたと考えることができようか。

 N_1 ブロックは、2点のナイフ形石器と小形の剝片類からなる。前述したようにその分布は散漫で

ある。ナイフ形石器は同ブロックの東端と南端からそれぞれ出土しており、中心部分からはずれたところに位置している。ブロックの主体をなす小形の剝片類は2点のナイフ形石器に挾まれるようにして分布するが、多くのものに使用痕とおぼしきものが認められる。また、第30図1のナイフ形石器は、今回の調査では同一母岩のものが検出されていないことから、未調査の他ブロックあるいは他遺跡からの搬入品と考えられる。

S群は $14 \times 10m$ ほどの範囲に礫、石器群が分布するものである。石器群は3箇所にまとまりがみられ、それぞれ S_1 、 S_2 、 S_3 ブロックとした。礫の大部分はS群分布内に散漫に分布するが、同群北端部に礫30数個が $0.5 \times 0.8m$ ほどの広がりの中に集中して検出され、これを礫群1とした。

ブロックを中心にまとまっているが、各ブロック間にも礫、剝片等が散布しており、集中度に欠けるまとまりといえる。

 S_1 ブロックは調査区の南東端に位置し、台地が東に緩く傾斜する部分にある。約 6×4 m の広がりをもち、ナイフ形石器、角錐状石器、鋸歯状石器等を含む石器群である。これらの石器群はブロックの周辺部に分布し、その内側に剝片が分布する。 N_1 ブロックでも同じようなあり方であったが、特徴的な展開をみせている。また、同ブロックの内外には拳大の礫がみられるが、まとまることなく散布している。ブロックの範囲を礫の散布部分まで広げると、隣接する他ブロックと重なり、ブロック間が明瞭に区分できなくなる。

 S_2 ブロックは S_1 ブロックの西約5 mのところにあり、台地の肩部に位置している。 およそ $2 \times 3.5m$ ほどの広がりをもち、南北に帯状に広がっている。ブロックの北側には 礫がまとまって隣接しており、 N_1 ブロックと同様なあり方をしめている。 ただ、 N_1 ブロックと異なる点はナイフ形の石器、石核などの資料がブロックの中央部分に分布している点である。垂直分布をみても比較的レベル差が少なく、 $20\sim30cm$ の範囲内に礫と石器群が混在している。ここでも、 N_1 ブロックのように1箇所のブロック、1箇所の礫群が重なって存在したものと理解される。

 S_3 ブロックは、 S_1 ブロックの北約 3 m のところにあり、台地の斜面部にかかって いる。 $0.8 \times 1.2m$ ほどの範囲に広がる小規模なブロックである。ブロックの南側にはまばらに礫が散布するが、 N_1 、 S_2 ブロックでみたようなあり方とは異なり、本ブロックとの直接の関係は見出せない。

礫群 1 は S_8 ブロックの北約 2 m のところにある。他の礫がある程度のまとまりをみせながらも、やや集中度に欠けるのに対し、本礫群は狭い範囲に密集している。 命名はしなかったが N_1 、 S_2 ブロックに隣接して分布するやや散漫な礫群とは趣きを異にする。ブロックとは明らかに分離され、単独で存在するものである。垂直分布からみた出土位置も安定している。また、同礫群には石核が 1 点出土している。礫群の南端からの単独出土であるが、礫群と直接かかわりがあるのか否か不明である。

さて、今回の調査で検出されたブロック、礫群の平面的な分布についてその事実関係を略述してきた。ただ、ここでは発見された石器、礫などが、本来の位置を失なわず、原位置を保っているという前提に立っている。自然の営力あるいは人為的な攪乱の有無については検証しないままで記述をすすめた。後者の場合、他時期の遺構との重複あるいは深度の天地がえしなどがひとつの目安となろうが、前者の場合、詳細に検証するすべを知らない。本遺跡では、平面的な分布からみると全

体にやや散漫な感じを受けるが、垂直分布をみると安定した状態を保っており、後世の大きな攪乱 もみられないようである。多少の移動はあるとしても、上述したブロック、礫群の構成、内容は大 きく変わるものではないと判断している。遺物が廃棄された後の移動は、ブロックの規模、石器組 成などをはじめ、多方面に影響を及ぼす。ブロックあるいはユニットなどと呼称される石器群の集 中箇所、礫群、配石、炭火物集中地点などが、先土器時代の解明に重要な鍵を握る重要な遺構であ るということには異論はない。だが常に、検出される遺物群が原位置を保っているか否かを検討し ながら調査、分析をすすめるべきであろう。

さて、本遺構からは 4 箇所のブロックと 1 箇所(命名しないものを含めると 4 箇所)の礫群が検出された。これらはいくつかの共通する面と異なる面を持っている。まず地形的な位置関係をみると、 N_1 、 S_2 ブロックが台地の肩部に、 S_1 、 S_3 ブロックは斜面上に在る。前者は等高線に沿って南北に細長く分布し、北側あるいは南北両端に散漫な礫群を伴なっている。石器組成をみても $1\sim 2$ 点のナイフ形石器に 20 点前後の剝片といった単純なものである。一方、後者は円あるいは楕円形にその広がりをみせ、礫群をともなわない。ただ、後者の場合、今回の調査で検出されたブロックでは最大規模のものと最小規模のものという好対称をみせている。また、視点をかえて石器の出土状況をみると、台地肩部にある N_1 ブロックと、斜面上にある S_1 ブロックでは、 剝片類がブロックの中心部に集中し、石器が周辺部に散在するという共通点がみられる。これらを短絡的に分類することは可能であろうが、遺跡の大部分がまだ土中に埋もれている現在、平面的なあり方についての結論は留保せざるをえない。

<先土器時代の石器>

該期の石器はその大部分が台地上から出土したが、低湿地調査区からも若干検出されている。低湿地調査区からの出土資料は、その出土状態から、すでに本来の位置を失なっており、ブロック内から検出された資料とは区別して扱うことにする。ここでは台地上から出土した石器群を中心に記述する。

出土した石器の内訳は、ナイフ形石器12点(台地上8、低湿地4)、角錐状石器2点、鋸歯状石器1点、石核4点(台地上3、低湿地1)、剝片144点(台地上138、低湿地6)となっている。

ナイフ形石器を中心とする単純な組成の石器群といえよう。

ナイフ形石器をみてみよう。素材に関しては、台地上検出の8点のうち、7点が縦長剝片を用いている。横長剝片を利用しているのは N_1 ブロックから出土した切出形のものだけである。低湿地出土のものはすべて縦長剝片を用いている。ナイフ形石器に関しては縦長剝片を多用する石器群であるといえる。

次に、調整加工が施された部位についてみてみると以下のように分類できそうである。つまり、一側縁加工のもの(1類)と二側縁加工のもの(2類)である。さらに1類は、先端部に部分的に加工を施すもの(1a類)、基部に加工を施すもの(1b類)、側縁の光以上にわたって加工を施すもの(1c類)に細分される。2類については、基部を中心に加工を施すもの(2a類)、全側縁の光以上にわたって加工を施すもの(2b類)に二分される。本遺跡出土の12点のナイフ形石器は上記したように、調整加工部位からみると5分類できる。

また、これらを形態的な面、形の大小などからみると個々に異なり、バラエティーがある。

さらに石材をみると砂質頁岩、チャート各3点、硬質頁岩4点(低湿地3)、黒耀石2点(低湿地1)となる。

次に、前述した分類にもとずいて各ブロックをみてみよう。

 N_1 ブロックは1a類と切出形石器で構成される。1a類のものは基部に平坦な打面をそのまま残す、平縁のものである。石材はともにチャートであるが母岩が異なる。

 S_1 ブロックからは3点のナイフ形石器が出土しているが、すべて一側縁加工のものである。しかし、1a、1b、1c 類とそれぞれ加工部位が異なる。これら3点は、用いられた素材の形状、大きさもちがっており、バラエティーがみられる。中でも1b 類とした第32図20のものは特異なものである。

 S_2 ブロックからは1 c 類が出土している。1 a 類との中間形であるが、調整加工が側縁の½に及んでいるため1 c 類とした。

S3ブロックからは形の整った2c類のナイフ形石器が出土している。

グリットから出土した黒耀石製のナイフ形石器は1b類のものである。 S_1 ブロックの20と同様、 打面、バルブを除去するように基部の一側縁に調整加工が施されている。

上記したように、台地上出土のナイフ形石器は1類が大半を占める。しかし、 $1a\sim1c$ 類は平均的なあり方を示し、ブロック毎による片寄り、石材によるある種の規定のようなものはみられない。

一方、低湿地からは 1 類、 2 類各 2 点が出土している。第30図 1 は 2 c 類の典型的な も の で ある。

さて、これまで遺物の平面分布とナイフ形石器について略述してきた。最後に総括的にまとめて おきたい。

- 今回は遺跡の一部分を調査したにとどまるが、ナイフ形石器を主体とする石器群が検出された。
- 出土層位はソフトローム下面からハードローム上半にかけてであるが、本来の位置はハードロームの上位にあると考えられる。ハードローム下半、黒色帯には及んでいない。
- 石材はチャート、砂質頁岩、硬質頁岩が主体を占めるが、他の安山岩、黒耀石、凝灰岩など 多様である。
- 4箇所のブロックを検出したが、地形的な立地、規模、礫群隣接の有無、石器組成、出土状態などから、2グループに分けられそうである。
- ○出土層位、垂直分布の状況などから同一時期の所産と考えられるが、ナイフ形石器の形態など から若干の時期差を考慮しなければならないと考えられる。
- ○組成は比較的単純で、ナイフ形石器の他角錐状石器、鋸歯状石器、石核が伴い、彫刻器、搔器などはみられない。

以上、事実記載に終始し、さらに詳細な分析、他遺跡との比較などがなしえなかったが、今回の調査では大略上記したような結果を得た。

第 5 表 伊奈氏屋敷跡先土器時代石器計測表

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ(3)	石 材
1	N ₁ ブロック	 ナイフ形石器	5. 5	2. 3	0. 9	7. 4	チャート
2	"	切出形石器	4. 3	1. 9	1. 2	6. 0	チャート
3	. "	剝片	4. 0	3. 9	0.7	13. 4	チャート
4	"	"	3. 1	2. 6	0.7	6. 2	チャート
5	"	"	2. 1	2. 2	0.8	5. 1	チャート
6	"	" "	2. 9	4. 3	0.5	6. 6	チャート
7	"	"	2. 3	2. 2	0. 5	1.6	凝灰岩
8	"	"	1. 5	3. 3	0.6	2. 3	チャート
9	"	, ,,	1. 7	2. 1	0.7	1. 3	チャート
10	<i>"</i>	"	2. 2	2. 3	0. 5	1.6	凝灰岩
11	"	"	2. 1	1.7	0. 3	1. 0	チャート
12	"	"	1. 3	1. 9	0. 3	0.6	チャート
13	"	"	1. 1	1. 8	0. 2	0. 4	チャート
14	"	"	1.0	1. 6	0. 3	0.4	チャート
15	"	"	1.5	2. 1	0.6	0.9	黒耀石
16	<i>"</i>	"	1.1	1. 2	0.3	0.3	チャート
17	"	"	2. 1	1. 0	0. 4	0.7	チャート
18	"	"	2. 4	1. 1	0.4	0.8	チャート
19	"	"	2. 2	1. 4	0. 2	0.4	チャート
20	S ₁ ブロック	ナイフ形石器	5. 5	2. 1	0.8	6.0	砂質頁岩
21	"	//	3. 3	1. 3	0. 7	2. 2	硬質頁岩
22	"	鋸歯状石器	3. 2	3. 3	1. 2	12. 8	黒耀石
23	"	ナイフ形石器	2. 2	0.8	0. 3	0.5	チャート
24	"	角錐状石器	4. 9	1. 4	1. 2	8. 5	安山岩
25	"	// ** ** ** // ** ** // //	2.6	1. 3	1. 5	4.9	黒耀石
26	<i>"</i>	, 石 核	4.9	4.7	3. 0	72. 4	安山岩
27	<i>"</i>	A K	3. 5	4. 6	2. 0	4.0	砂質頁岩
28	"	剝 片	8. 2	4. 7	1.7	52. 4	安山岩
29	<i>"</i>	*** /1	6. 9	4. 7	1.7	57.6	安山岩
o0	"	<i>"</i>	5. 6	6.9	1. 7	90.6	安山岩
31	"	<i>"</i>		5. 4		76. 9	安山岩
32	" " " " " " " " " " " " " " " " " " "	"	7.1	7.6	1. 8 1. 6	60.6	砂質頁岩
33	"	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	6.3	3.9	1.6	27. 9	砂質頁岩
34	"	"	6. 3	4. 0	2.7	61. 1	砂質頁岩
35	"	<u>"</u>	3. 5	5.7			安山岩
36	"	"			1.4	20.5	
	<i>"</i>		3.3	4.3	1.2	17. 8 5. 5	安山岩
37 38	"	// // // // // // // // // // // // //	2. 1	4.6	0.6		砂質頁岩 砂質頁岩
39	<i>"</i>		3.0	3.8	1.1	8.5	
	" " " " " " " " " " " " " " " " " " " "	"	3.7	2. 9	0.9	6.9	砂質頁岩
40		ルスコンプ明	2. 2	3. 2	0.7	5.9	安山岩
41	S ₁ ブロック	ナイフ形石器	3. 5	1. 2	0.6	1.7	砂質頁岩
42	"	剝 片	3. 2	2. 7	0.9	6.6	安山岩
43	"	<i>"</i>	8. 4	5. 9	2. 1	102. 6	安山岩
44	"	石核	4. 5	5. 2	1.5	45. 1	安山岩
45	S ₂ ブロック	ナイフ形石器	3. 6	1. 2	0. 7	3. 1	砂質頁岩
46	"	剝片	1.6	0.7	0.3	0.3	碩質頁岩

番号	出土地点	器	種	長さ(cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重さ(3)	石 材
47	S3 ブロック	剝	片	1. 3	0.8	0.3	0. 2	黒耀石
48	礫 群	石	核	3, 5	3. 6	1. 3	14. 6	黒 耀 石
49	グリット	ナイフ形石器		3. 1	1.6	0. 5	1. 2	黒耀石
50	"	剝	片	5. 2	1.7	1. 0	6. 7	硬質頁岩
51	"	"		3. 9	2. 4	1.0	6. 6	硬質頁岩
52	"	"		1.9	2. 4	0.9	3. 2	硬質頁岩
53	<i>"</i>	"		3. 4	4. 0	1.4	17. 1	安 山 岩
54	"	"		3. 5	1. 3	0.7	2. 3	砂質頁岩
55	"	"		3. 7	5. 2	1.4	21. 3	砂質頁岩
56	"	"		2. 0	2. 1	0.9	3. 5	チャート
57	//	"		3. 5	3. 3	1. 5	8. 2	硬質頁岩
58	"	"		2. 0	1.4	0.7	0.8	黒耀石
59	"	"		2. 1	1. 2	0.5	0.6	チャート
1	低湿地調査区	ナイフ形	石器	5. 5	2. 2	0.7	6. 0	硬質頁岩
2	"	"		3. 8	2. 0	1. 0	4. 4	黒 耀 石
3	"	"		3.0	1. 2	0.3	0.8	硬質頁岩
4	"	"		1.6	2. 0	0.3	0.7	硬質頁岩
5	"	剝	片	2. 2	2. 0	0.9	1. 1	硬質頁岩
6	"	"		4. 5	1. 2	1. 4	4. 4	黒耀石
7	"	"		5. 5	2. 3	1. 2	10.6	チャート
8	"	石	核	3. 4	4. 0	1. 3	11. 6	黒 耀 石